

4025

特23

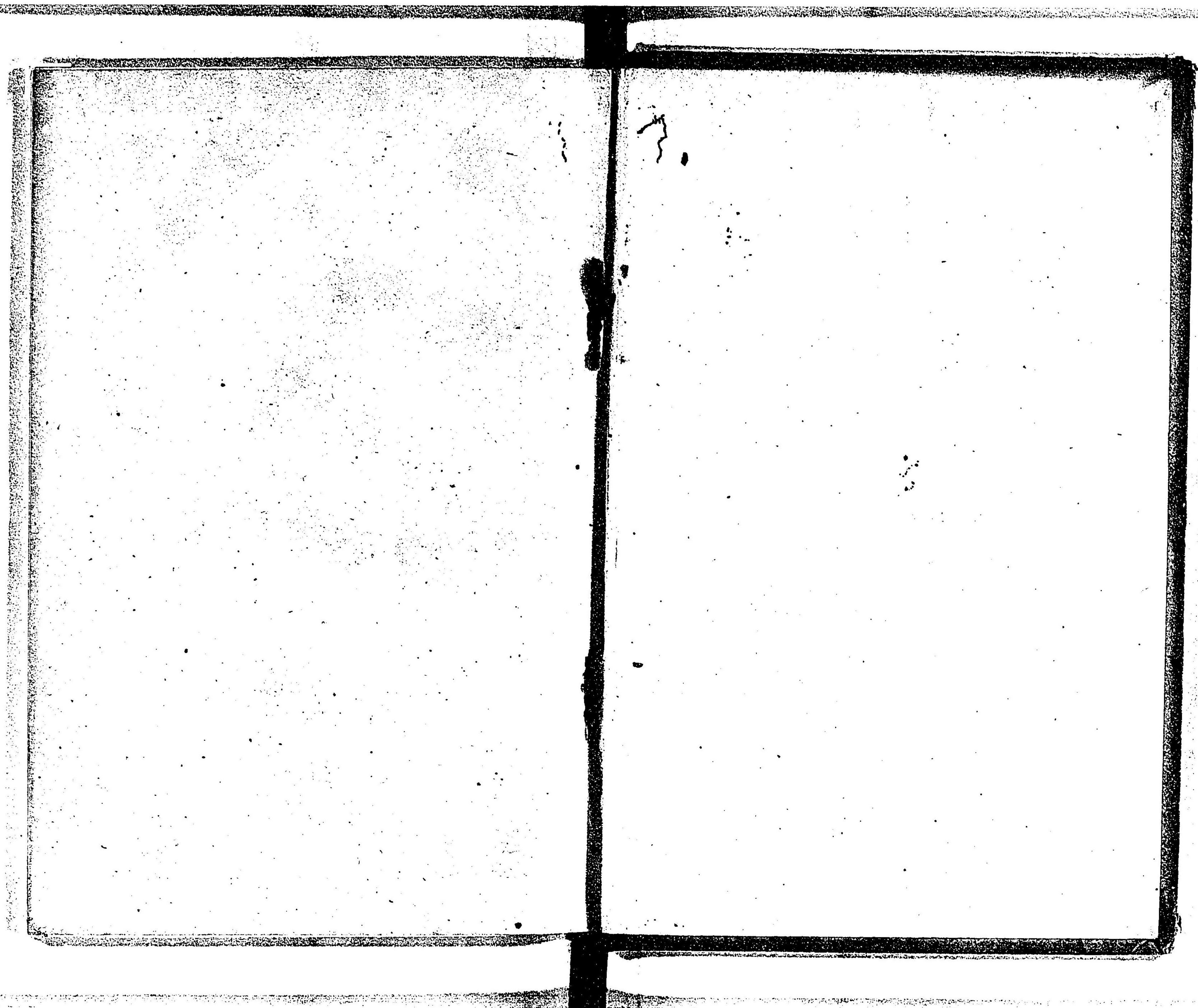
291

鳥居枕著

卷之上

音楽道のたより

東京 千鐘房



特23

291



東京音楽館

明治二十年六月二十一日内務省交付

タケ

文書

音楽の心理

緒言

鳥居 忱 述

諸君 私ハ鳥居忱と申す不行届のもので御座います。唯今より嗚呼ケ間敷も諸君に對して音楽上の理論と其記號との大畧を御話致す積りで御座います。然し私ハ不幸に天性の辨で御座います。故に御話を致す内諸君も定めて御聴きおさり惡ひことども多くありま。よふがそここのところハ何卒大目に御覽おされて御判断の上御聴取りの程偏に願ひます。

音楽上の理論ハ形而下の音響學 ACOUSTIC 形而上の心理學 PSYCHOLOGY 又「音楽ハ美術なり」の點より觀ますと

審美學 ÆSTHETIC 等種々高尙な學問も入用であるとか申し  
ますが然し音樂其物に直接ある理論の學問は先づ

第一 樂典 MUSICAL GRAMMAR

第二 旋律學 MELODY

第三 和聲學 HARMONY

の三つであります

此旋律學と和聲學とハ音樂専門の人の學ぶべき者で普通  
に唱歌や洋琴杯を習ふ方には先づ 不要と申しても宜  
しからふと考へます然し此第一に掲げましたる樂典ハ假  
令普通にも致せ苟も音樂を學ぶものゝ知らて協はぬもの  
でありますから唯今諸君に此樂典の御話より致す積りで

御座います

シテ其樂典とハ直接平易に申しますと音樂記號之學とも  
申すべき者で丁度文學の文典に相當するものであります  
シテ觀ますると文學を學ぶには是非共文典を知らなければ  
はあらず音樂には又樂典を習はなければなりません  
偕其樂典を學ぶと申しても一ト通り音や音律や音程や  
音階や拍子の工合運動の模様等は大概知らなければあり  
ませむ若し其等事實を知りませむで唯其記號ばかりを知  
りましたとてそれでは本當に知つたとは申されませむ  
強いて知つたと申しても種々様々の疑が起り其記號も實  
際本當の役には立ちませむ

其故御話は少しく冗長に涉りますが先づ其事實の御話を致し夫より段々と

第一 事實門

第二 記號門

第三 樂器門

の順序により御話致す積りで御座います尤此三門の細部分は一々茲に掲げますと頗る繁雜にありますから別段委い目錄には致しませむで其所々に見出しを附て置きます一躰私は固より江湖大方の君子に對して何も御話致す積りでのありませむから勉めて平易に致す心得であります「偕て世の諺にも名は躰を顯す」と申す通り此書の名否此御

話の題ハ音樂道のしるへと申して是迄チットモ音樂の事を御承知かい方の爲めに致すとでありますから博識廣才の方々には定めて羽癢きこととの多きことかおと思召しましよふが其段は宜しく御海容の程偏に企望致します「シテ又古語にも月を指さして指を忘れ魚を得て筈を忘る」杯申して御座いますから諸君も初めの程こそ眞面目に此「話を御聽おされ暫時にして忽ち學理も技藝も御上達おさらハ斯の如き區々たる一家の鎖言彼の月に對する指の如く魚に於ける筈の如く全く不用の長物とありはて、諸君は最早名人とも上手とも御成りおさる、ハ疑おきことぞ」又是のみ今日より豫め企望致す處で御座います

附言 偕此御話に肝心ある音楽の定義種類性質効用等  
ハ別に詳説致す積りでありますゆゑ茲にハ暫く御預り  
に致して置きます

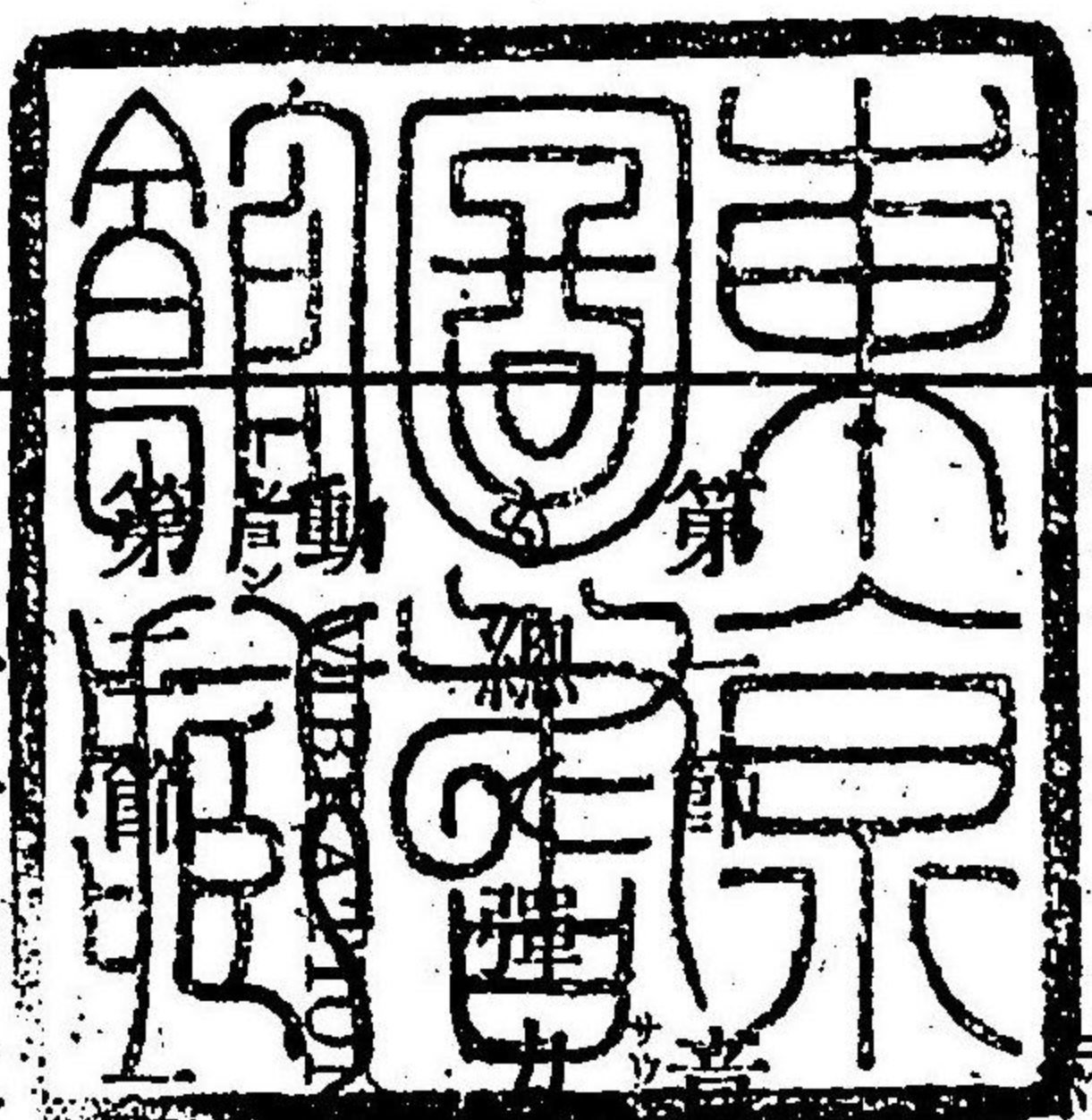
音楽道志るべ卷の上

事實門 第一部

緒論 音

第一章 定義及試験法

SOND と申すものは氣躰でも液躰でも固躰で  
性に富める物躰の分子が他物の衝突を受け顛  
と申す運動を生ずるものであります  
躰此顛動と申すことは非常に早い運動ですか  
ら一寸目には見悪くありますゆゑ今容易く目に見へる様



第一 振り PENDULUM

第二 一絃琴 MONOCHORD

第一章 定義及試験法

を用ゐて其理合の御話を致すことゝしましよふ左様致すと余の訥辨で直接に其顛動の御話を致すよりも却て容易く御合點あさるだらふと考へます

第三節 倍此より振子と一絃琴との試験をして御覽に入るゝこととしま志よふ

第二章 振子之試験

第一節 振子は一條の絹糸の一端に何にても重き小球例へば斯く圓き象牙の小球を縛り附けし物でありすま。シテ其系の上端を

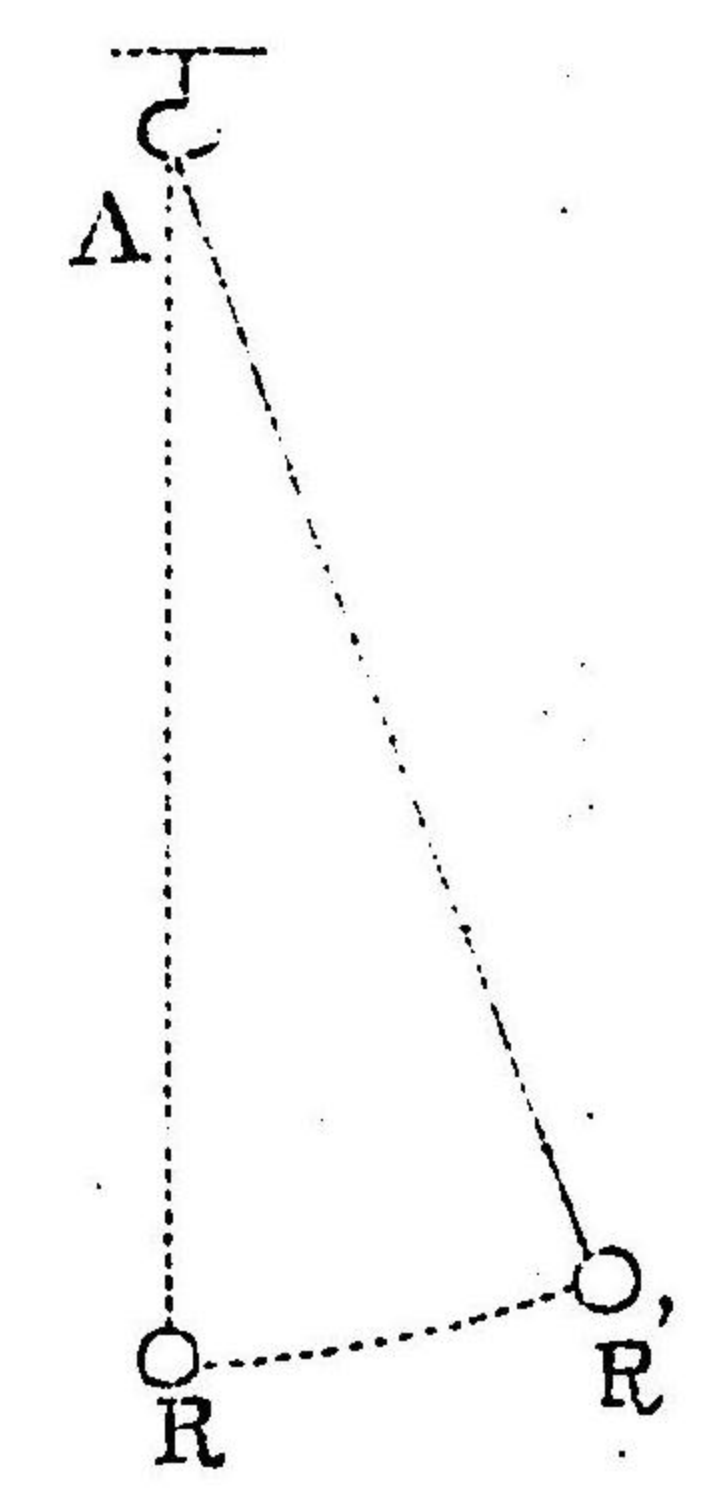
第一圖



の如く横木に打附たる釣に懸けるか或は左手に持つか或は鴨居杯に掛けるかするとR球の重力之中心が全くA懸點の直下にありますから此振子は平均不動の有様に静まりて居ます

第二節 然るに其R球を採り

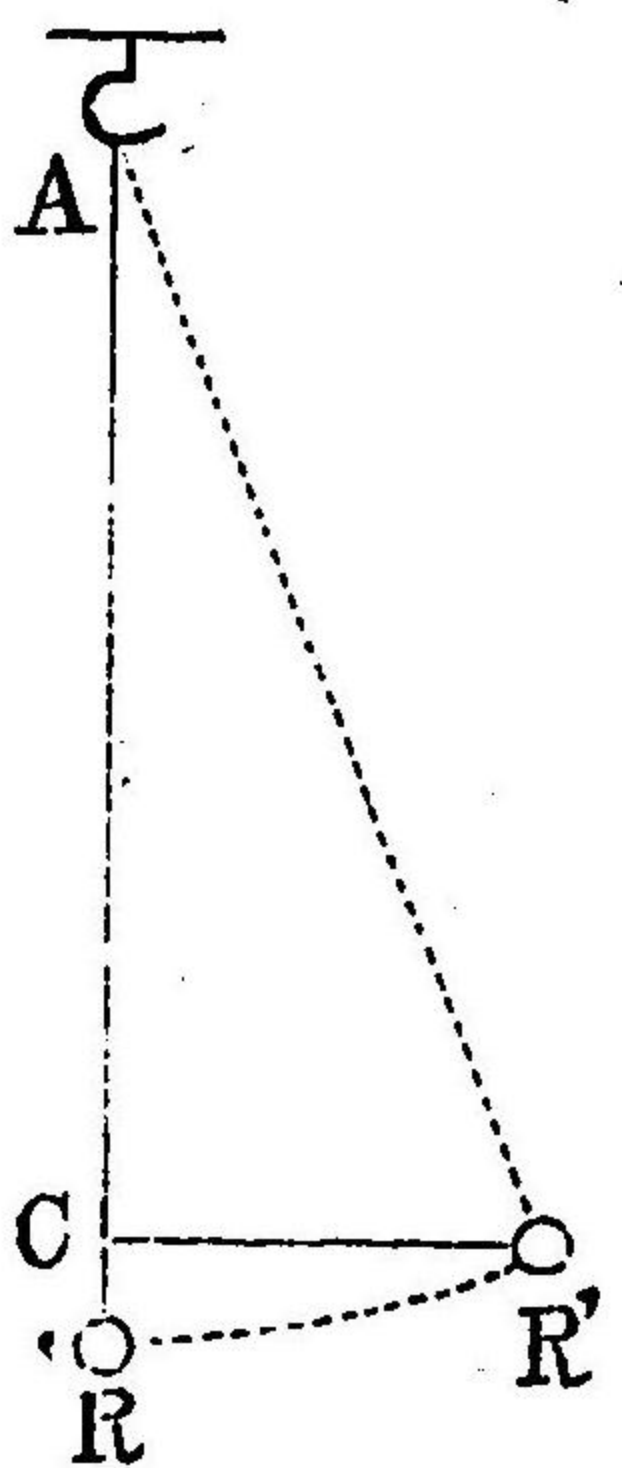
第二圖



の如く引張り適當の所R點にて離しますと其球を直ちに



第三圖



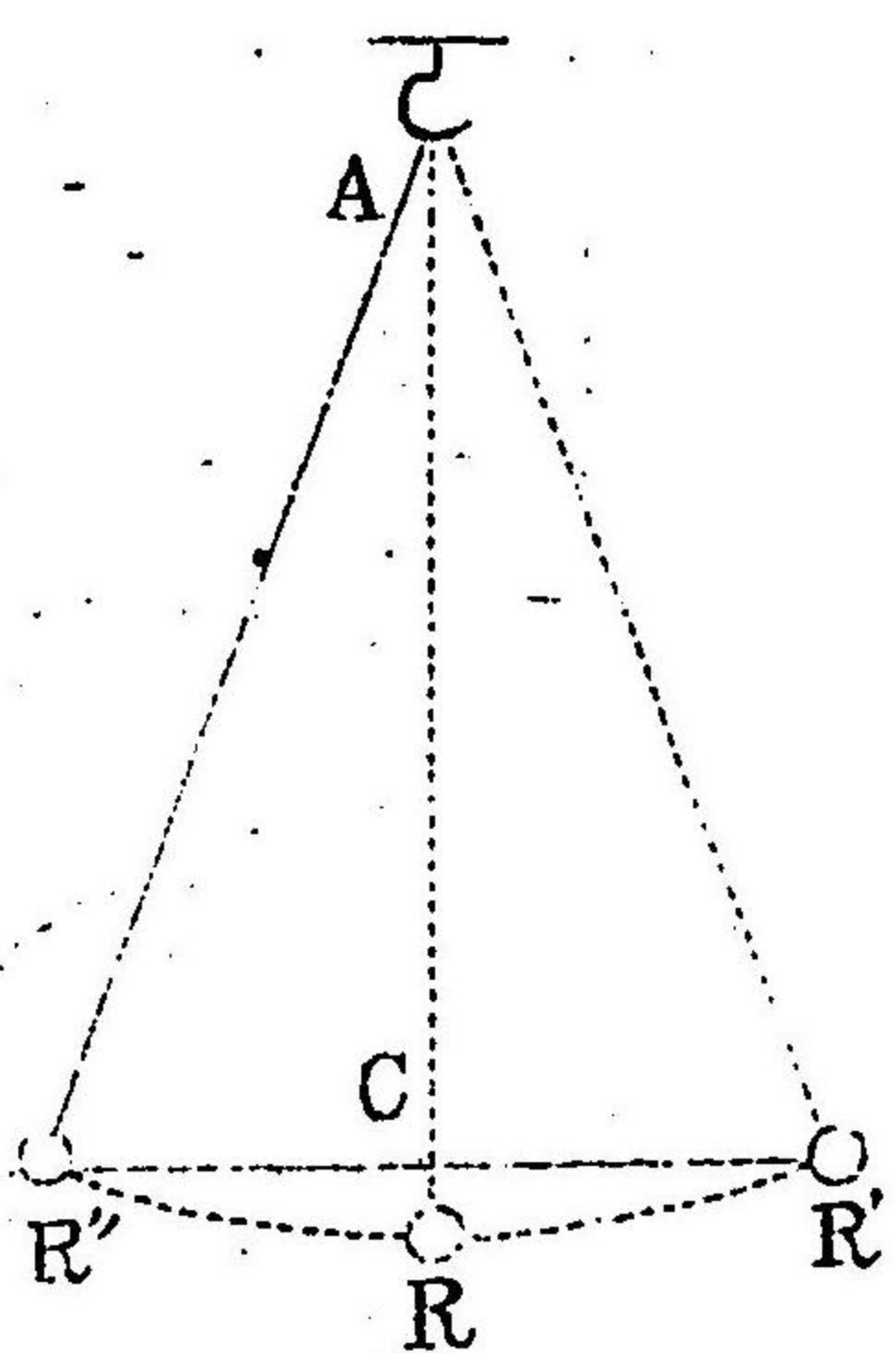
の如くCある高さよりR'ある道を経てR點(原の位置)に下り来ります

附言 R點とR'點と比へますと無論R點の方が高くあり又R'はCと同じ高さにありますとR'より球の走り来るは恰もCより落ち来ると同じことであり

第三節 全軀此球は其所にて原の平均位置に復すべき筈

であります。がR'より下り来るとき得ました「ハズミ」に因り更に

第四圖



の如くRよりR'に向て上り行きます

第四節 偕てR'よりRへ下るとききの力を**急速力 ACCELERATIVE FORCE**と申し又RよりR'へ上るとききの力を**遅緩力 RELATIVE FORCE**と申します

第五節 前陳の如く振子が R' より R'' まで走るのを單振 SIMPLE OSCILLATION と申します シングルオシレーション

第六節 又振子は R より R'' に到着すると直様引返して R'' より R' へ R'' より R' へ運動を続けます尤も今度は其向きと其力とは全く前の振りとは反対で R'' より R' へは下り R' より R' へは上り R'' より R' への力は急速力 R より R' への力は遅緩力とありますソコで振子が R'' より R' に走るのをも矢張振子の單振と申すことは諸君も已に前節に就いて御理會のことゝ存じます

第七節 偕 R' より R'' へ R'' より R' へ往復する二回の單振を合せて振子の複振 DOUBLE OSCILLATION と申します ダブルオシレーション

第八節 シテ其運動の距離は R より R' まで R より R'' 迄も同じこととであります

第九節 R' 及 R'' 之の遠かり(即ち A の角度)を振之開き AMPLITUDE といひます(但し開きは通常 C 點を通過して R' より R'' までの距離と心得るも別段不都合はありません)

第十節 同一ある振子に於きましては振之開きが大きくあるも小さくあるも其運動に要する時間は同一時間 ISOCRONISM であります

第十一節 振子は前に陳べし様に R' より R'' へ R'' より R' へ走りつゝ幾回となく「アチヲコチヲ」へ運動しますホ左様に運動して居る内に

第一 重力

第二 懸點之摩擦

第三 空氣之抵抗

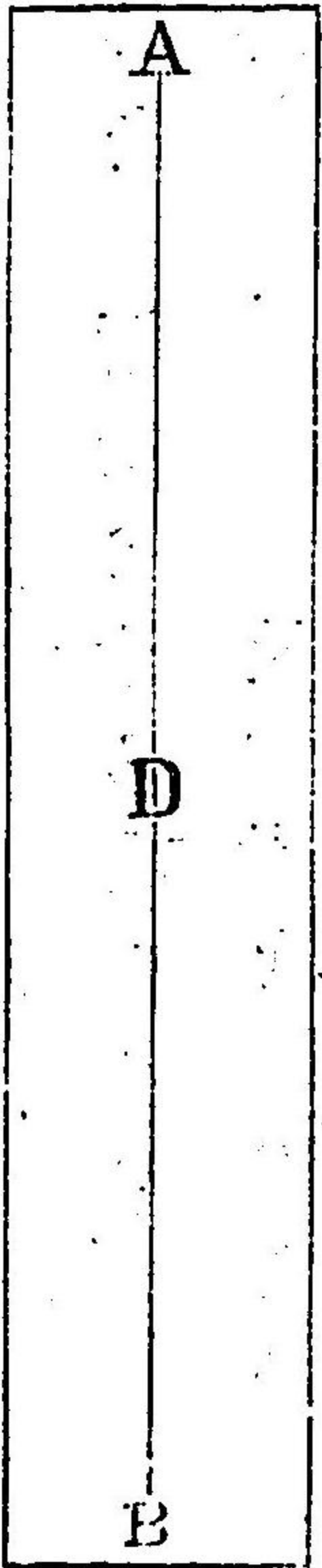
等に因り其開きは漸々小さくあり遂には第一圖の如く全く原の平均不動の有様に復つて終ふものであります

第三章 一絃琴之試験

第一節 諸君茲に又一面の一絃琴があります其甲を御覽あさい墨にて眞黒に塗り太い三味線の絃が掛けてありますソコデ此一絃琴をは斯様に其儘眞直に立て、置きますと其三味線の絃は全く平均不動の有様に在ります是れは恰も第一圖の振子が平均不動の有様に在りましたのと全

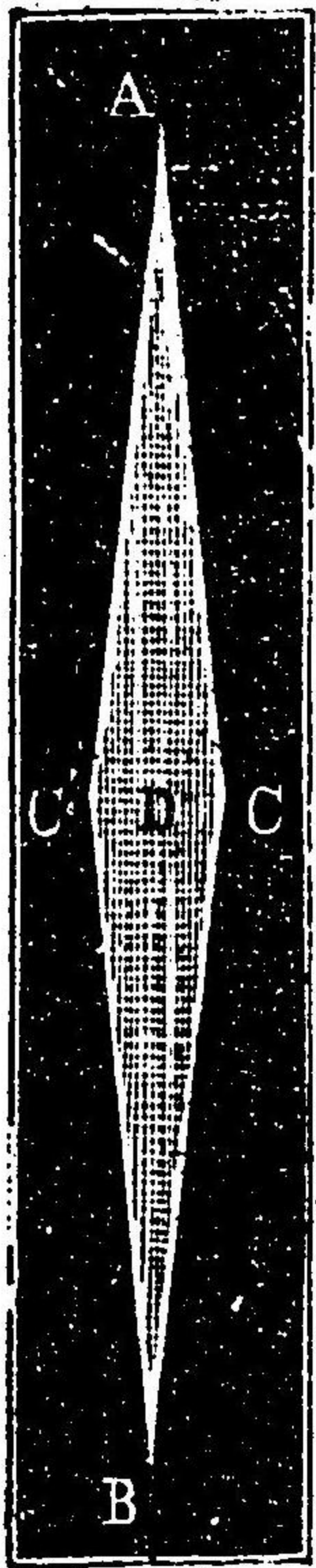
く同じことでありませふ

第五圖



第二節 ソコデ今私が拇指と人差指で其絃の中央(D點)を摘み曳ま張りして適宜の所(即ちC點)

第六圖



にて放ちますと其絃は恰も振子の球がCよりDへ向つて振動させしと同様に其原位置に復らんと欲し中央即ちD點に至ります然るに其絃C點より走り來りました速力に

より其原位置即ちD點に止ることが出來ず更にC點を目  
差して走り往きます其C點よりD點まで走る運動を各け  
て是ぞ顫動 VIBRATION と稱しますさて其絃がC點に到着  
しますと忽ち引返して復運動を初めます然し今度は其方  
向を轉してCよりDに走りゆきますが此運動をも矢張り  
顫動とは申します

第三節 倍顫動には其回數を算しますのに二方あります

第一 或はC點よりD點まで或はD點よりC點まで  
運動しますのを一顫動とする人もあり

第二 C點よりD點まで及D點よりC點まで走る運  
動を一顫動とする人もあります

第四節 尤是は其人々の所見に因りますが大躰其國々に  
より或は甲説を採る習慣があり又乙説を採る習慣があり  
ます然し何れにも各得失があります先づ甲説の長する所  
は事實上穩當でありますし乙説の方は便利であります果  
して甲説を採りますと或はC點よりD點まで或はD點よ  
りC點までを一顫動とするのを單顫動 SIMPLE VIBRATION と  
申し又C點よりD點まで及D點よりC點までを一顫動と  
するのを複顫動 DOUBLE VIBRATION と申します

第二章 樂音噪音之差

第二節 一躰人間の聽官に感します者に二種あります

第一 樂音 MUSICAL SOUND

第二 噪音 NOISE

第二節 樂音とは「リン」とか「チーン」とか云ふ様に人間に連續的的感覺 CONTINUAL SANSATION を生ずる者で其上「此音は高」とか「彼音は低」とか云ふ様に音之音樂的價値 MUSICAL VALUE OF SOUND を評定し得る者であります

第三節 然るに彼の噪音の如きは不循環的顫動の繼續より生ずるもので頗る駁雜ある短き音であります例えバ岩打つ彼の音松吹く風の聲或は震雷或は大砲の響の如く其音の高低は殆んど評定し得ざる者であります

第四節 音響學に於ても音樂に於ても唯一口に音と申せは無論樂音の事であります

波

第三章 音之三特性

第一節 樂音には三つの特別の性質があります其性質と申すは

第一 高度 PITCH

第二 大度 INTENSITY

第三 音色 TIMBRE

であります

第二節 高度は一定時間(一秒時間)に發音物躰が生ずる顫動之數 NUMBER OF VIBRATION の多少よりして吾聽感に生ずる所の印象 IMPRESSION であります一定時間中に顫動之數愈多ければ其音は愈高く感じ顫動之數愈少ければ其音は

二十  
愈低く感じます一躰音の高いと申し低いと申すも全く感  
覺上の有様を比喻へて申したものであります吾々が若し  
顫動數の多き音を聴きますと精神が何となく引立ちて恰  
も高臺に昇る様か心持が致し又顫動數の少き音を聴ます  
と精神が何たか引入りて恰も洞穴へでも降る様か心持が  
致す處からして斯くは高い低いと申すのであります然し  
全躰音の純然たる高低と申すハ人間の感納し得る最高最  
低の極音に於て初めて成立つ者で其中間に位します諸音  
の高低此は高い音だ彼は低い音だといひますのは恰も寒  
暖計で昨日は度が高かつた今日は度が低いわいと申す様  
に總て比較の上より申す事であります左れば世の中の人

が一音を聴いて高とか低とか大概に評定しますのは居常  
聞慣たる音を標準に致し現在聴きます音の高低を定むる  
のであります

第三節 大度は顫動の開きの廣狹に基く者でありますさ  
れ六其開き愈廣ければ其音愈大く其開き愈小さければ其  
音愈小さくある者であります例えバ今此一絃琴も其鳴り  
初めには其音随分大きくあります次次第に小さくあ  
り遂には無聲にありて終まいますのでありますむか一絃  
琴が斯様に大聲より小聲に、小聲より無聲にありますのも  
畢竟は其絃の開きが初めの程は廣くあります漸く狭く  
ありトウ、終には原の通り不動靜止の位置に復るから

の事でありませ

第四節 音色は其原因甚だ困難な者であります故昔より是れと申す確説はありませんでした近頃獨逸國 HEIDELBERG 府大學校の卒業生にして方今伯林府大學教授の職に在る N. HELMOLTZ と云ふ大學者生理學物理學數學の大家の考按に由りますと「音色は一物躰より同時に發する數音の和聲的結合あり」と申します今此説を手輕に解明しますに色彩に比喻へて觀ましよふが黄は單色赤も單色青も又單色でありますソコで其單色ある黄と青と混合しますと緑とあり又單色ある赤と青と結合しますと紫とあります諸音色も恰も之れと同様で譬へば黄とも申すべき音と青

ともいふべき音と結合すると琴の音とあり又赤とも申すべき音と青とも云ふべき音と結合すると三味線の音とあると云ふやふある者で其他簫笛箏篋等も皆斯の如き理合の者であります現に婦人や小兒杯のキイ／＼いふ聲を黄ろい聲といふ所から觀ますと今私が彩色の比喻で御話致すも敢て無理ではませぬ其上 FIMBER をは邦語で音色といふでハありませむか

第一節 一躰音と申す者は其生します物の態により固躰は固躰液躰は液躰氣躰は氣躰で其理合は自然相異なる者であります又同固躰でも其形により絃見た様な條は條磬見た様な板は板太鼓の様な膜は膜金棒の様な竿は竿で又

自然相異なる者でありソシテ氣躰でも其管により箏篋は  
箏篋、笛は笛、簫は簫と申す様又自然相異ありますから條、板  
膜、竿、管を一々御話致すへきであります。が今回の處は唯音  
と申す者の概畧丈を御話致す心得であります。から一番簡  
易で一番必要で一番模範ともあるへき條の一例に就て聊  
か御話致し。其他は總て省畧致して後日に譲りました。諸君  
も何卒其思召で御聽流しを願ひます。

本論

第一編 音律

第一章 西洋之音律

第一節 是より音律と申すことの御話をしましよ。然し  
其音律と申す者は御話致すに隨分六ヶ敷い物であります  
が手短かに申すには先づ斯様申せば稍々適當からんかと  
存します。曰く「凡そ音律は諸音の高度上の比 RAPPORT あり」  
第二節 凡そ音の發生しますに其整調上より論トますと

第一 天然音 NATURAL NOTE

第二 人工音 ARTIFICIAL NOTE

の二種があります。





	日本	ろ	い	と	へ	は	に	は
	佛國	SI	LA	SOL	FA	MI	RE	DO
第八圖	獨逸	H	A	G	F	E	D	C
	英米	B	A	G	F	E	D	C
	音律	○	●	○	●	○	●	○

附言 諸君の内には或は斯く仰せらるゝ御方もありませふ其御言葉に西洋にてはA B C 日本にてはいろはと云ふ様に何故に其順序を追ふて名を付けき或はC D E 或はには等の如く稱せしや甚だ以て不思議千萬あり且つDO RE MIの譯ハ何如と必らず御疑も起りましよふシテ其御疑は至極御尤でありますから私も其御答への致

度存ますが左様致すと御話其沿革上に涉ります故是又暫く御預りと致して置きます

第七節 此のいろはの七字を各けて調名と申します

第八節 借又人工音には別段名稱を附けませんで時としては上の天然音に時として下の天然音に關係をとりて其名稱を與えます

例えは○●○の中間の人工音に

第一 ○●○の如くはより關係をとりて嬰(は)と云ひ  
 第二 ○●○の如くはより關係をとりて變(に)と云ひ  
 ます斯く同一人工音でありながら上下の天然音の關係により或は嬰(は)と云ひ或は變(に)と申す様に二箇の名稱を持





の通りであります

附言 其より上層あれば上方に下層あれば下方に二點を打ち三點を打ち四點五點と何點にても其十二連音の重なるに隨ひ或は上方に或は下方に其點數を増す事でありませ

第十六節 いろはの上方に一點打つ者ハ上單音と申し下方に一點打つ者ハ下單音と申し

上下共二點あれば或は上點二音或は下二點音と申し

三點あれば或は上三點音或は下三點と申し

四點五點六點七點皆前の通りに上下何點音と申しませ第十七節 前陳の通り同名異音を區別しませ法方は原と

日耳曼人の發明致せし至極便利な方法であります然し原の方法ハ其音の層により或は大字音或は小字音單點音一點音二點音等に區別しませが左様致すと甚だ繁雜でありますから私は專斷ながら前陳の如く(い)ろ(は)の字は一つで無點のを基礎と致し上下の音層により上下共其點數を増す計りにて其音層の區別を致しましたシテ其便利と申す先づ其要點は

例えは茲に二人の者かあるとしますソユデ其二人の者か音律上の談話を致すに方り甲の人が上單點(は)音は云々下二點(は)音は云々と申しますと乙の人其物と其名とを記憶して居ります以上は唯空想にてもハ上單點(は)

音は「アレダナー」フン下二點は音とは「コレダナー」と目に其物を見ず耳に其音を聴かざして容易く其意を理會する事でありましよふ萬一此方法のありません時には甲の人か乙の人に對かひ突然「君あの(は)音は高いと思ふか」と云ひますと乙の人は更に其意を解せず妙お顔をして「あの(は)音とはどの音か僕には分らぬい」ホラあの(は)音さ「唯あの(は)音あの(は)音とはかり云つてはチットモ分らぬいぢやぬい」が「君も餘程覺りのわるい男だ」ソラあの(は)音だ「アレツタイ男だ」ドツチガ「アレツタイかしれやしぬい」君の方が餘程愚だ「ソナラ勝手にしろ」杯と遂には大論判を始め一場の騷動を惹起すに至りましよふシテ見ると

此方法は頗る便利な者でハありませむか

## 第二章 西洋及日本支那之音律之對照

第一節 西洋の音律は一と通り御話いたしましたから是より西洋の音律と日本の音律又西洋の音律と支那の音律との比較の大意を御話いたしましよふ音律は實に不思議の者で古今東西共小異大同の者で

西洋にては(は)より(は)までを平均十二音に分ち

東洋にては(は)より(は)までを平均十二音に分ち

ます尤分つと申しても尺度の目盛をする様に致す譯ではあく一種の方法があります然し其方法は又追て御話致すことゝしましよふ

第二節 左に西洋と日本との音律對照表を掲げ其名稱を説明しよふ



附言 右掲律名は其内多分は古實讀みにて一寸讀み惡くあります故一と通り假名を附けて見しよふ一越斷金平調勝絶下無雙調鸞鐘黃鐘鸞鏡盤涉神仙上無と讀みます此名稱は日本樂家の通常呼ぶる所の者で原と音律の名稱やゝありませむが因習の久き遂に律名とありて

しまひました

第三節 左に西洋と支那との音律對照表を掲げ其名稱を説明しよふ



附言 此十二律の名稱ハ隨分支那にて古より之れある者で夙に周禮にも見え又史記にも見えて居ります杜氏通典杯にも詳に此十二律のことハ説いて御座います此等ハ總て畧します





て夫より次第に細くして短き者より二本三本と唱ふるや  
に承りました

第二編 上 音程

第一章 音度並音級

第一節 音程 INTERVAL と申しますものは其原羅句語の INTER-  
VAL (間) VALDUM (柵) 即ち柵之間と云ふ文字より轉訛せし者で  
あります其故今音楽に於まして柵之間の語を借用致し音  
程と申しますと或る高低二音の間に成り立つ距離のとを  
申します其二音の距離は恰も相對する二柵の中間に於け  
る距離の様るものであります  
第二節 今より其音程に就て御話を致しますが其御話を  
致す前に

第一 音度 DEGRE

第二 音級 STEEP

と申す事を御話致して置かふければありません

第三節 音度とは或る二音間に在りて自親其名稱を有せる天然音其物の數であり又之を測らんとする方は其二音間の調名の數をかぞへて定めませ譬は聽衆諸君中私に御尋ねあさるに

(第一)「(は)より(ほ)までは幾度であるか」と仰せらるゝと私  
は(は)(に)(ほ)と指を折りて三音を數へまして「(は)より(ほ)ま  
ては三度で御座る」と答へます

(第二)「(は)より(ほ)までは幾度であるか」と御尋ねあさると  
私(は)(は)(に)(ほ)と指を折りて三音を數へまして「(は)より(ほ)  
(變)ほ

または矢張り三度で御座る」と答へます

第四節 シテ觀ますと前の(は)より(ほ)までも後の(は)より(變)ほ  
までも同じ様に三度でありますが然し前の(は)(は)より(ほ)後  
の(は)(は)より(變)ほまでありませ現在左様に前のと後のとは  
其關係は半音の高低ではありませむか實に(は)より(ほ)まで  
は半音高く(は)より(變)ほまでは半音低く箇様に半音の差があ  
りあがら同じ様に唯三度とのみ申しましては其音程上更  
に長短の差別が付きませむソコデ其差別を附けませすのに  
是非共然るべき方法が入用であります其方法と申すは即  
ち音級のことでありませ果して其音級を用ゐませすと前陳  
二箇の音程ハ判然と區別が付きませす

第五節 倍音級との天然音でも人工音でも押並へて毎半音の距離を一音級と定むる者であります抑此音級ある者ハ實に能く彼音度の性質を確と指定する者であります左れば

第一 前の(は)より(は)までは(變)は(變)は(は)と五半音上進しますから四音級あります

第二 後の(は)より(變)までは(は)に(變)に(變)はと四半音上進しますから僅に三音級であります

第六節 前陳(は)より(は)までも(は)より(は)までも音度に就て觀ますと前後共同し様に三度でありますが音級に就て觀ますと前のは四音級後のハ三音級で前のを遠いとみると

後のハ近く前のを長いとみると後のは短くありまふよふ第七節 ツコテ総て斯様も同度の異性の音程を區別しますには

第一 遠い者ハ長 MAJOR

第二 近い者ハ短 MINOR

と申す形容詞を用ゐますシテ觀ますと前陳二箇の音程を名状しますに

第一 前のを 長第三度

第二 後のを 短第三度

と申します

附言 斯様に音程の性質を顯す形容詞ハ音に此長短の

二語にハ止まりませむ此外種々あります其ハ後に委しと御話しませよふ

第二章 音度音級之比喻話

第一節 諸君前章に於て音度と音級との差別ハ既に御理會にありしこと、推察しますすが尙一應念の爲に一つの比喻を設けて御話致しませよふ譬ハ今東京の人が江の嶋詣(相模國江の嶋辨才天へ參詣すること)をするとしましよふソコデ其人が東京の日本橋を立ちて江の嶋まで往きますのに

第一 「其驛亭ハ幾何ありや」と申しますに(1)日本橋(2)品川(3)川崎(4)神奈川(5)程ヶ谷(6)戸塚(7)藤澤(8)江の島と都

合八驛あります此日本橋より江の島までの驛數が恰も音程の音度に相當するものでありますから日本橋より江の島までが八驛あれば(は)より(は)までハ八度ありといふ様あ者であります

第二 ソコデ「其里數ハ若干ありや」と申しますと確とい知れませむが大凡(1)日本橋より品川まで二里(2)品川より川崎まで三里(3)川崎より神奈川まで三里(4)神奈川より程ヶ谷まで二里(5)程ヶ谷より戸塚まで二里で都合殆ど拾六里程あります此日本橋より江の島までの里數が恰も音程の音級に相當する者でありますから日本橋より江の島までが拾六里あれば(は)より(は)までハ十二

級と申す様事でありませす

第三章 単音程及複音程

第一節 今音程の境域上の點に就て觀察しませすと

第一 單音程 SIMPLE INTERVAL

第二 複音程 DOUBLE INTERVAL

の二種がありませす

第二節 其單複二種の音程と申しませすのハ

第一 單音程例えハ(ハ)より(ハ)までの域境内に成り立つ者でありませす

第二 複音程例えハ(ハ)より(ハ)以外に成り立つ者でありませす

第三節 然し此複音程ある者は畢竟單音程の重複に外あらざる者でありませすゆゑ其音程の性質種類等を調べませすには只單音程を精しく取調べませすと其れにて宜いしことでありませすシテみませすれば複音程は總へて單音程に直して觀おければありませむ

第四節 偕其複音程を單音程に直しませす方法は先づ或る二音間の音度を數へて度數を求めませして其求得たる度數より定數(7)を減じ得るだけ何たひでも減じませすシテ最後に得ました殘數(7)より少數が即ち單音程の度數でありませす

今茲に一例を掲げませしよふ例へハ(ハ)より(ハ)までの複

音程がわります。ソコデ此複音程を單音程に直します。は(は)より(は)までの度数を數へます。拾度を得ます。此拾度即ち10より定數7を減します。殘數3を得ます。此3が即ち複音程拾度を單音程に直した度数であります。されハ複音程拾度は單音程に直すと僅に三度であります。

尙又一例を掲げましよ。例えは(は)より(は)までの複音程がわります。今度も亦其度数を數へて拾七度を得ます。其より定數7を減じて10を得ます。尙定數7を減して3を得ます。此3が矢張單音程三度と申す事であり。申す第五節 シテ觀ます。れハ複音程拾度も拾七度も共に單音

程にてハ僅に三度であります。唯前陳の三度のみに限らす。総て斯様に致します。と何如に隔絶した複音程でも容易に單音程に直すことが出來ます。

第四章 拾四音程

第一節 倍單音程中音程の元素とも申すべき者が拾四箇あります。シテ其拾四箇の音程ハ音樂上最必要者で之をハ拾四音程とハ申す。今より逐一其御話を致します。

第二節 第一度(同音 UNISON)ハ同一音で例えハ(は)より(は)までの音程であります。此音程ハ其實無音級にして想像の音程とも申すへき者であります。然し此音程が拾四音程の基礎であります。シテ其名を中性第一度 NEUTER PRIME と稱

します

第三節 第二度に就てハ其距離或ハ二音級の者があり或ハ一音級の者があります其れば例えハ或ハ(ハ)より(ハ)まで或ハ(ハ)より(ハ)まで(ハ)までの二種の音程であります

第一 (ハ)より(ハ)までの音程ハ(ハ)嬰(ハ)に(ハ)を二音級に涉りて居ります斯音程ハ各けて長第二度 MAJOR SECOND と申します

第二 (ハ)より(ハ)までの音程ハ(ハ)嬰(ハ)と僅一音級にて斯音程ハ稱して短第二度 MINOR SECOND と申します

第四節 第三度に就てハ其距離或ハ四音級の者あり或ハ三音級の者があります其れハ例えハ或ハ(ハ)より(ハ)まで或

ハ(ハ)より(ハ)までの二種の音程であります

第一 (ハ)より(ハ)までの音程ハ(ハ)嬰(ハ)に(ハ)と四音級に涉りて居ります斯音程ハ長第三度 MAJOR THIRD と申します

第二 (ハ)より(ハ)までの(ハ)嬰(ハ)と三音級に涉り之をハ短第三度 MINOR THIRD と申します

第五節 第四度の其距離或ハ五音級の者あり或ハ六音級ある者かあります例えハ或ハ(ハ)より(ハ)まで或ハ(ハ)より(ハ)までの二種の音程であります

第一 (ハ)より(ハ)までの音程ハ(ハ)嬰(ハ)に(ハ)と五音級に涉りて居ります斯音程ハ完全第四度 PERFECT FOURTH と申します

第二 (は)より(嬰)までの(は)(嬰)(に)(に)(は)(へ)(嬰)と六音級に  
涉ります之をバ PLUPERFECT FOURTH と申し  
ます

第六節 第五度の或ハ七音級或ハ八音級例えバ或ハ(は)よ  
り(と)まで或ハ(は)より(嬰)までの二種の音程があります

第一 (は)より(と)までの(は)(嬰)(に)(嬰)(は)(へ)(嬰)の七音級  
で之をハ PERFECT FIFTH と申し

第二 (は)より(嬰)までの(は)(嬰)(に)(嬰)(は)(へ)(嬰)の六音級で  
之をハ IMPERFECT FIFTH と申します

第七節 第六度の或ハ八音級或ハ七音級例えハ或ハ(は)よ  
り(い)まで或ハ(は)より(嬰)までの二種の音程があります

第一 (は)より(い)までの(は)(嬰)(に)(嬰)(は)(へ)(嬰)(と)(嬰)(い)の八  
音級で之をハ MAJOR SIXTH と申し

第二 (は)より(嬰)までの(は)(嬰)(に)(嬰)(は)(へ)(嬰)の七音級  
で之をハ MINOR SIXTH と申します

第八節 第七度の或ハ十音級或ハ九音級例えハ或ハ(は)よ  
り(ろ)まで或ハ(は)より(嬰)までの二種の音程があります

第一 (は)より(ろ)までの(は)(嬰)(に)(嬰)(は)(へ)(嬰)(と)(嬰)(ろ)の十音級  
で之をハ MAJOR SEVENTH と申し

第二 (は)より(嬰)までの(は)(嬰)(に)(嬰)(は)(へ)(嬰)(と)(嬰)(ろ)の九音級  
で之をハ MINOR SEVENTH と申します

第九節 第八度の十二音級例えハ(は)より(は)までの音程





表程音四拾種二第

は	ろ	嬰 <sup>ロ</sup>	い	嬰 <sup>イ</sup>	と	嬰 <sup>ト</sup>	へ	ほ	嬰 <sup>ホ</sup>	に	嬰 <sup>ニ</sup>	は	至 從
中一													は
短二	中一												ろ
長二		中一											嬰 <sup>ロ</sup>
短三	長二	短二	中一										い
長三		長二		中一									嬰 <sup>イ</sup>
完四	長三	短三	長二	短二	中一								と
大四		長三		長二		中一							嬰 <sup>ト</sup>
完五	大四	完四	長三	短三	長二	短二	中一						へ
短六	完五	不五	完四		短三		中一						ほ
長六		完五	大四	完四	長三	短三		中一					嬰 <sup>ホ</sup>
短七	長六	短六	完五	不五	完四		長二	中一					に
長七		長六		完五	大四	完四			中一				嬰 <sup>ニ</sup>
中八	長七	短七	長六	短六	完五	不五	長三	完四	中一				は

(備考)

此二ツの表中に記しました(1)中の中性、完の完全、大の不完全、不の不完全、長の長、短の短、あり(2)一は第一度、二は第二度、三は第三度、その他四五等も皆音度の數を示したものであります

表程音四拾種一第

は	ろ	嬰 <sup>イ</sup>	い	嬰 <sup>ト</sup>	と	嬰 <sup>ヘ</sup>	へ	ほ	嬰 <sup>ニ</sup>	に	嬰 <sup>ハ</sup>	は	至 從
中一													は
短二	中一												ろ
	短二	中一											嬰 <sup>ロ</sup>
短三			中一										い
	短三	長二	短二	中一									嬰 <sup>イ</sup>
完四	長三		長二	短二	中一								と
不五	完四	長三		短二		中一							嬰 <sup>ト</sup>
完五	大四		長三	短三			中一						へ
短六	完五	大四	完四	長三	短三	長二	短二	中一					ほ
	短六	完五		不五	完四		長二		中一				嬰 <sup>ニ</sup>
短七			長六	完五		完四	長三	短三		中一			に
	短七	長六			完五	大四			長二		中一		嬰 <sup>ハ</sup>
中八	長七		長六			完五		完四	長二			中一	は



第一 上下二音を同時に上げますと(は)は(嬰)は(い)は(嬰)とあり

第二 上下二音を同時に下げますと(は)は(嬰)は(い)は(嬰)とあり

どちらも矢張り長第六度であります

第二 或る短音程例えは(は)より(と)までの短第三度かあるとしましよふ

第一 上下二音を同時に上げますと(は)は(嬰)は(と)は(嬰)とあり

第二 上下二音を同時に下げますと(は)は(嬰)は(と)は(嬰)とあり

どちらも矢張り短第三度であります

第三 或る長音程例えは(は)より(い)までの長第六度があるとしましよふ今此長音程を短音程に變しますには左の二個の場合があります

第一 下の音即ち(は)を其儘にして置いて上の音即ち(い)を(嬰)に下げ

第二 上の音即ち(い)を其儘にして置いて下の音即ち(は)を(嬰)に上げ

ましてもどちらも短第六度であります

第四 或る短音程例えは(は)より(と)までの短第三度があるとしましよふ今此短音程を長音程に變しますには左

の二個の場合があります

第一 下の音即ち(は)を其儘にして置いて上の音即ち(と)を(嬰(と))に上げ

第二 上の音即ち(と)を其儘にして置いて下の音即ち(は)を(變(は))に下げ

ましてもどちらも長第三度とあります

第五 或る長音程例えは(は)より(い)までの長第六度があるとしましょふ今此長音程を増音程に變しすには左の二個の場合があります

第一 下の音即ち(は)を其儘にして置いて上の音即ち(い)を(嬰(い))に上げ

第二 上の音(い)を其儘に置いて下の音(は)を(變(は))に下げましてもどちらも増第六度とあります

附言 第一 中正第一度 が 増第一度

第二 完全第四度 が 大完全第四度

とありますのも全く此場合であります

第六 或る短音程例えは(は)より(と)までの短第三度があるとしましょふ今此短音程を減音程に變しすには左の二箇の場合があります

第一 下の音即ち(は)を其儘にして置いて上の音即ち(と)を(變(と))に下げ

第二 上の音(と)を其儘に置いて下の音(は)を(嬰(は))に上げ

ましてもどちらか減第三度とあります

附言 第一 中正第八度 が 減第八度

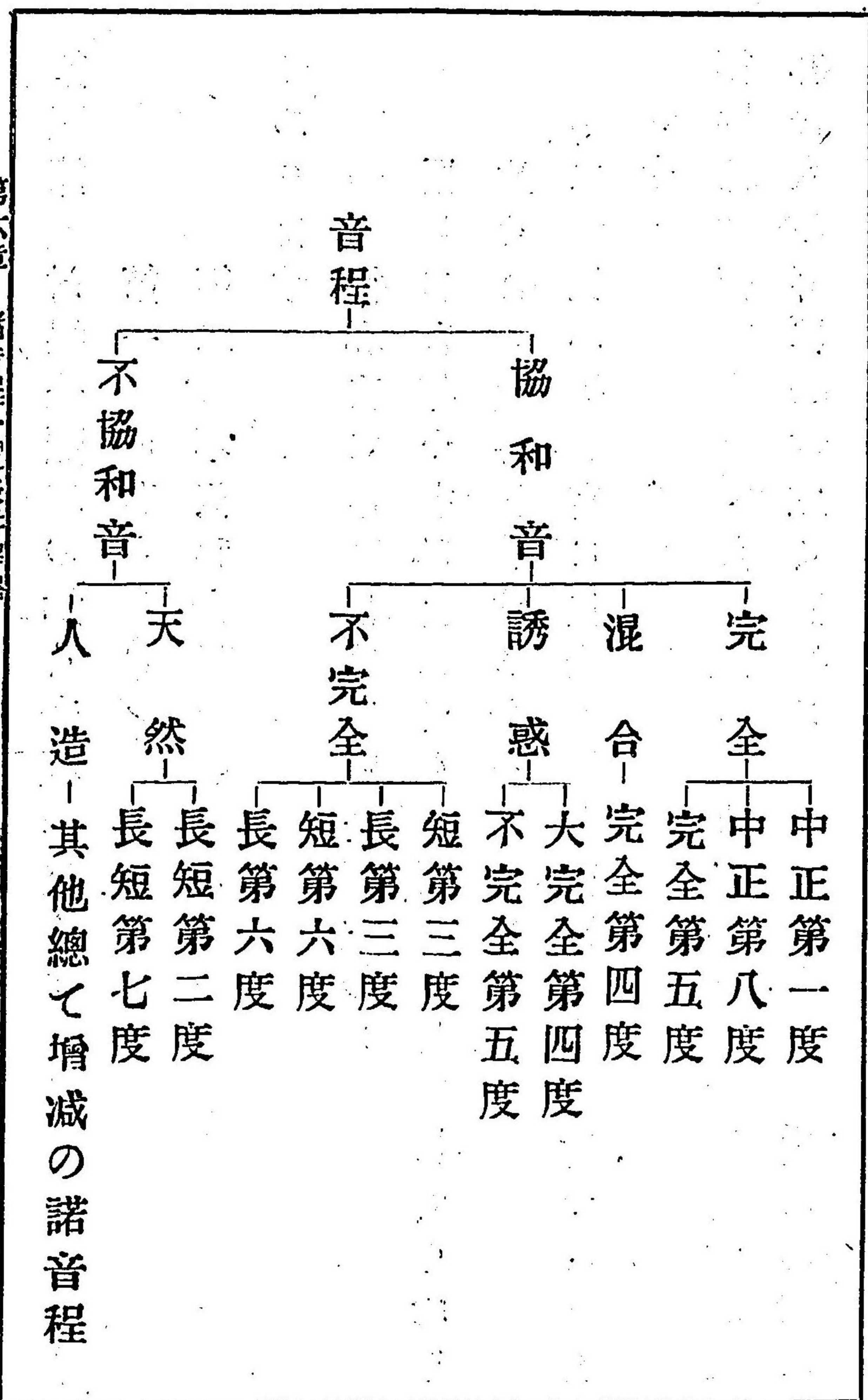
第二 完全第五度 が 不完全第五度

とありますのも全く此場合であります

第六章 諸音程一覽表并解説

第一節 音程の大畧は已に前陳の通り御話致して仕舞ましたから是より音程の結極を和聲的并に旋律的に御話致しましよふ否咄々御話致そふよりも寧この一覽表にて其概括を御覽に入れる方が御理會あさるに却て善からふかと存します

第二節 左に其一覽表を掲げます



第三節 前掲一覽表の如く音程には大別

第一 協和音 CONSONNANCE

第二 不協和音 DISSONNANCE

であります

第一 協和音と申すは其音程を組立つる上下の二音を同時に音聲で唱ひましても樂器で奏しましても心地宜く吾人の耳に感ずる者であります

第二 又不協和音とは全く協和音に反する者であります

第四節 協和音は前陳の通り種々に小分は致しますが大躰吾人の耳に心地宜く感ずるものであります然し其感し

方に様々の差等がおります借其協和音を細分しますと

第一 完全協和音 PERFECT CONSONNANCE

第二 不完全協和音 IMPERFECT CONSONNANCE

第三 混合協和音 MIXTE CONSONNANCE

第四 誘感協和音 ATTRACTIVE CONSONNANCE

であります

第一 完全協和音は太だ宜く感します

第二 不完全協和音は少く宜く感します

第三 混合協和音は幾分か完全の氣味合もあり又幾分か不完全の氣味合もあり判然完全とも不完全とも確定し兼ねます所より遂に此名稱は起る事とありました

然し多分の學者ハ大目に見做して一ト通りに完全協和音の部類に入れて仕舞ます

第四 誘惑協和音とは御話致すに随分六ヶ敷くありますが先づ其大畧を申しますと此協和音は感覺上殆んど協和音と不協和音との中間に位する程の者であります故是れこそ實に協和音とも不協和音とも判別し兼ねる者であります然し其感覺は別段壯快といふ程ではありませんが兎にも角にも第四度と云ひ第五度と云ひ音程中一二を争ふ歴々の名流でありますから或は幾分か其名義にめんじて協和音の部類に入れし者でありましよふよしや僥倖に協和音の部類に入れられてありますも

其實協和音とも不協和音とも判然確定することが出来ませむ故斯様に誘惑てふ形容詞を附けまして到底純然たる協和音にてあらざる意味を寓せし者でありましよふ

第五節 不協和音ハ細分しますと

第一 天然不協和音 NATURAL DISSONNANCE

第二 人工不協和音 ARTIFICIAL DISSONNANCE

であります

第一 天然不協和音との原來何如様に致しても調和せざる者であります

第二 人工不協和音との其原ハ多少調和致しましたが



幾分か人工を加へました故遂に不調和とありし者であります

七十

### 第七章 音程之結論

第一節 前陳の通り協和音不協和音との何如あることかと御不審おさる方も恐らくはありましょふから一寸其譯を御話を致します先づ協和音と申しますハ或る二箇の音例之ハ(ハ)と(ド)とを同時に「ピアノ」か又は「オルガン」で鳴しますと何如にも清朗ある和音を發します又(ハ)と(ロ)とを鳴しますと何如にも粗暴ある和音を生じます今度ハ「ピアノ」「オルガン」の代りに甲乙二人にて同時に甲ハ(ハ)乙ハ(ド)又甲ハ(ハ)乙ハ(ロ)と二様に合唱してみますと矢張り前同斷の

結果を得ることであります

第二節 斯様に樂器にいたせ人聲にいたせ一ハ清朗ある和音であり一ハ粗暴ある和音であります下の音ハ常に(ハ)でありあから何故上の音が(ド)の時ハ清朗ある和音を發し(ロ)の時ハ粗暴ある和音を生ずるかと申すと畢竟前の者にかきましてハ(ハ)より(ド)までの關係ハ完全第五度で即ち完全協和音でありシテ又後の者ハ(ハ)より(ロ)までのハ長第七度で即ち天然不協和音であるゆゑであります

第三節 其他諸の音程とても皆此道理で其結果が清朗あれば其源因に溯りてみますと必ず清朗ある理合であります又其源因が粗暴ある時ハ其結果に至つてみますと必ず

粗暴であります総て二音の關係ハ皆斯様でありますから  
 清朗ある和音を發しやふと思ひますれハ其結果の清朗で  
 あるべき原因によらなければありませむ又粗暴ある和音  
 を避けやふと思ひますれば是非共粗暴あるべき原因から  
 して避けなければありませむソレその原因を知るハ即  
 ち前陳の一覽表を御熟覽にありますと自然御理會にあり  
 ます

第三節 一體道理と申すものハおかしきもので和聲的關  
 係にて工合の宜しいものハ旋律的關係でも矢張り工合が  
 宜しいものでありますされハ前陳の和聲的にて粗暴ある  
 和音を發する(はる)の長第七度は旋律的にても工合が悪し

く又清朗ある(はと)の完全第五度は工合が宜しく其他の諸  
 音程も皆斯様な理合で和聲的で宜しければ旋律でも宜し  
 く和聲的で否されは旋律的でも亦否ざる者であります  
 第四節 前陳の如き理合でありますから苟にも唱歌教授  
 に從事なさるる方は殊更此音程の音度音級に御注目なさ  
 らなければありませむ若し茲に御注目なさいますと(何)よ  
 り(何)には容易く(何)より(何)には六ヶ敷いといふことが唱は  
 れぬさきから明瞭に御解りにあります果して御解りにあり  
 ますと唱歌御授業の時此音程は六ヶ敷いから此處に能く  
 御注意しければあらん彼音程は容易いから左程であく  
 ても宜しいと其難易を識別する事が出来ます

第二編 下 轉回

第一章 定義及其方法

第一節 茲に又音程之轉回と申す事があります一鉢其轉回と申すことの英語にて INVERSION と申しまして其意ハ即ち「サカサマニスルコト」といふことであります

第二節 ソコデ音程の轉回ハ其音程を組立たてる上下二箇の音の雙對位置を

第一 下の音を其儘にして置いて上の音を一八音下の方に

第二 上の音を其儘にして置いて下の音を一八音上の方に

「ヒツクリカヘス」のであります

第三節 左に其例証を掲げて御目に懸けましよふ

第一 茲に(は)より(と)までの完全第五度の音程があります  
すが其下の音(は)をバ其儘にして置いて上の音(と)を一八音下の方に轉しますと(と)ハ(と)とありますソコデ(は)より(と)までの完全第四度が出来ます此完全第四度をは即ち完全第五度之轉回と申します

第二 又(は)より(へ)までの完全第四度の音程があります  
が其上の音(へ)を其儘にして置いて下の音(は)を一八音上の方に轉しますと(は)ハ(は)とありますソコデ(へ)より(は)までの完全第五度が出来ます此完全第五度を完全第四度之

轉回と申します

第二章 本原音程及其轉回之對照表

第一節 何如ある音程でも單音程である以上は轉回は總て前陳の如くであります是より茲に單音程の本原音程 ORIGINAL INTERVAL と其轉回との對照表を御覽に入れまじよふすと私は多分の辨を費さず諸君は容易く御瞭會に於る事と存します

本原音程			轉回		
1	中正	第一度	中正	第八度	
2	短	第二度	長	第七度	
3	長	第二度	短	第七度	

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4
中正	長	短	長	短	完全	不完全	大完全	完全	長	短
第八度	第七度	第七度	第六度	第六度	第五度	第五度	第四度	第四度	第三度	第三度
中正	短	長	短	長	完全	大完全	不完全	完全	短	長
第一度	第二度	第二度	第三度	第三度	第四度	第四度	第五度	第五度	第六度	第六度

第二章 本原音程及其轉回之對照表

第二節 諸君此表を熟々御注目あさると一種奇妙な變化のある事か御發見にあります即ち音度に就きましては

- 第一 第一度 は 第八度
  - 第二 第二度 は 第七度
  - 第三 第三度 は 第六度
  - 第四 第四度 は 第五度
  - 第五 第五度 は 第四度
  - 第六 第六度 は 第三度
  - 第七 第七度 は 第二度
  - 第八 第八度 は 第一度
- とあります

第三節 此轉回の音度を前掲の如くに悉皆記臆しますは誰しも六ヶ敷き事であります故私に次に一箇の簡便法を御話して置きましょふ

其方法は先づ現在其處にある本源音程の音度を數字に顯はし其數を別に假りに設けたる $\rho$ といふ數より引去ますと直ちに其差を得ます其差が則ち轉回音度の數であります

例之は茲に第一度の音程がおりますが其音程之轉回が知り度き時は前法により假設數 $\rho$ より本源音程ある第一度即ち1を引去りますと $\rho$ を得ます是れが轉回音度の數で即ち第一度の轉回は第八度と云ふ事であります

又第八度の轉回が知り度き時には9より8を引去りま  
すと1を得ます即ち第一度と云ふ事が分ります  
第七節 尤斯様の場合に於きましては轉回音程の性質即  
ち音級は未だ確とハ志れませずたゞ本源音程幾度の轉回  
は何度といふだけを知るに止るも注であります

第三章 記臆簡便法

第一節 今此方法により第一度より第八度までの轉回音  
程の模様を掲げます

記臆簡便法

9	9
7	8
2	1

數數度	9	9	9	9	9	9
之度音	1	2	3	4	5	6
設源回	8	7	6	5	4	3
假本轉						

第二節 諸君第二章第一節の表に御注目あさいますと又  
左の如きことを御發見あさいます即ち性質に就きまして

ハ  
 第一 中正 は 中正  
 第二 完全 は 完全  
 第三 長 は 短  
 第四 短 は 長  
 第五 大完全 は 不完全  
 第六 不完全 は 大完全  
 とあります

第四章 轉回之結

第一節 諸君熟々左の對照表を御觀察なさいますし  
 第一 協和音 は 協和音

(1) 完全協和音 は 完全協和音

(2) 不完全協和音 は 不完全協和音

(3) 誘惑協和音 は 誘惑協和音

第二 不協和音 ハ 不協和音

(1) 天然不協和音 は 天然不協和音

(1) 人工不協和音 は 人工不協和音

とあります諸君何んど道理と申す者は實に奇妙不思議な  
 者でハありませんか

第三篇 音階

第一章 定義及種類

第一節 凡そ何如ある音楽にても一曲中に彼の十二律ある者を悉皆用ゐる者ではありませぬ其音楽の性質により一定の關係ある若干音を用ゐる者であります其一定の關係ある若干音の繼續をば音階とぞ申します

第二節 私の師匠米國音楽博士 エドワード・マッソン L. W. MASON 氏が或時私に「凡そ人間の地上に動作し得る所以は全く背髓があるからである若し背髓がつかつたから暫しも此地上に立ち居ることゝ出来はしまひそれと同一ことで若し此音階がつかつたから音楽は受合て成立つ者ではあらずに實に音楽の



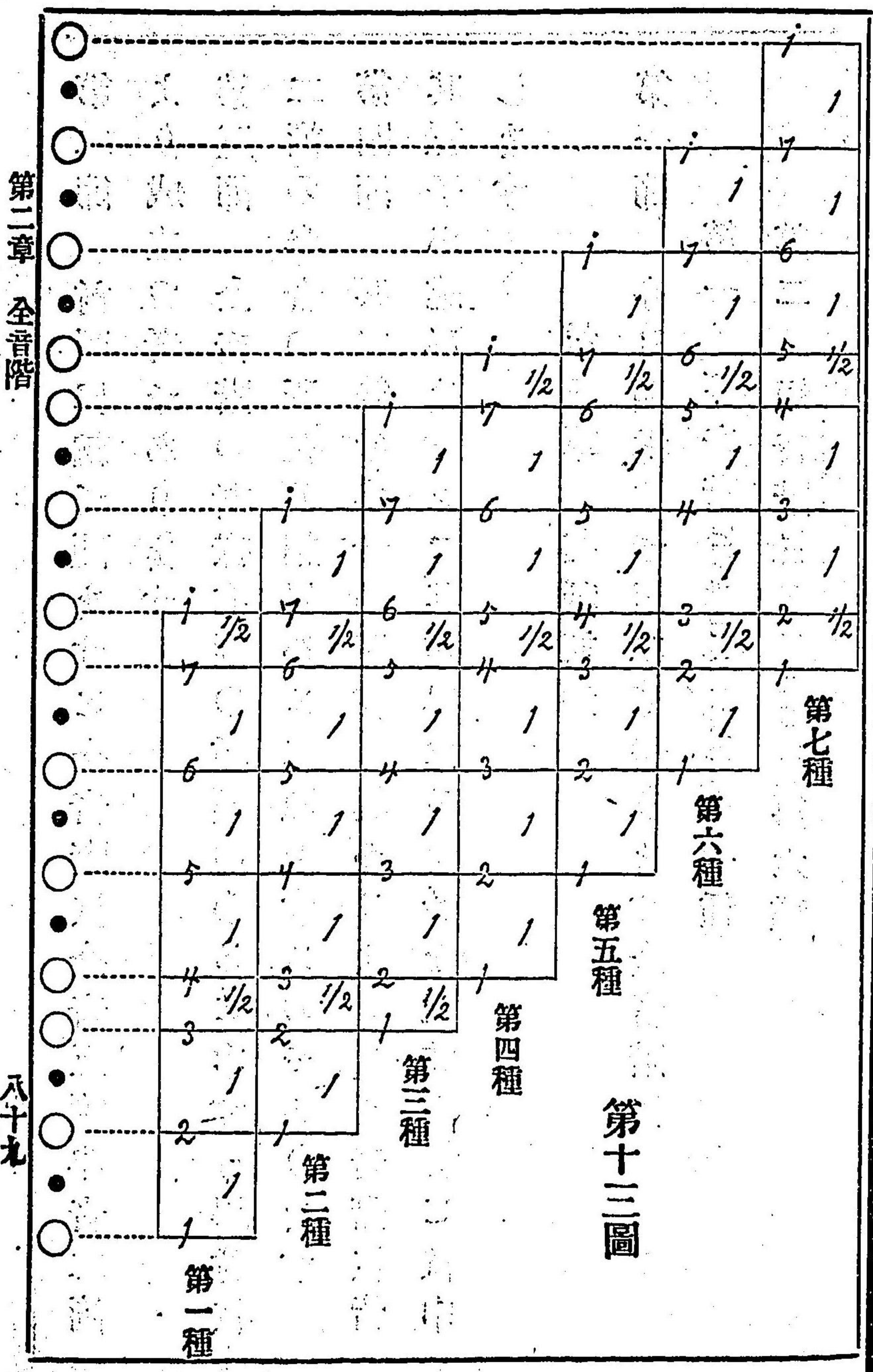
音階は人間の背髄と同じものであると申しました

第三節 此音階と申すハ一口に申せば音之梯子と謂ふ意味でありまして英語にて之をSCALEと申します抑此SCALEと申すは英語では唯階梯と申すまでの語でありますが本邦では總て英佛獨露等の原語を翻譯しますに其熟語の頭に軍事上に關する文字には軍の字を附け法律上に係はる文字には法の字を附けますのが翻譯上慣例にありて居ります故今此SCALEを邦語に譯しますにも頭に音の字を冠らして音階とば申します

第四節 シテ又音の梯子の意味あれば音梯とは申すべきに左は申さず音階と申すは如何にも御不審に思召しまし

よふが別段深い意味のある譯ではありませむ成程其形状は何如にも梯子に類似致して居りますが畢竟其各音は梯子の階段其上に存在致して居ります故音梯とは云はず音階とは申します其上已に音程と申す事もありますゆゑ音梯音程稱呼上混雜が起りますゆゑ旁以て音階と申す方適當でもあり便利でもある事と存します

- 第五節 抑音階には大別三つの種類があります其三つの種類と申すは
- 第一 全音階 DIATONIC SCALE
- 第二 半音階 CHROMATIC SCALE
- 第三 四分音階 ENHARMONIC SCALE



であります

第六節 倍此三種の音階の中で音楽上に最必要な者は第一の全音階であります第二第三の半音四分音の二音階も随分必要のあいではありませんが前の全音階に比へますと幾分か優劣がありますから其故此には先づ全音階を稍詳細に御話し致し次に半音階四分音階を鳥渡其大畧だけ御話し致すことゝしましよふ

第二章 全音階

第一節 全音階には七箇の種類がありますソコで此七箇の全音階は(ば)より(ろ)までの天然人工の二拾四連音中の天然音のみ採用して構造せし者であります

第二節 前圖に就て觀ますと全音階は全音五箇、半音二箇より成立つ者であります

第三節 全音階の斯様七箇の種類のあると申すも畢竟は二箇の半音の所在の相異なるに原因するのであります

第四節 其二箇の半音の所在の異なるよりして音階は皆其様子が違ひますシテ其違ひたる様子を旋法(MODE)とは申します

第三章 七種旋法

第一節 今日西洋にて用ひて居ります全音階は

第一 長音階(MAJOR SCALE)(第一種)

第二 短音階(MINOR SCALE)(第六種)

の二種であります

第二節 今日日本邦雅樂にて用ひてゐます音階は

第一 呂旋(第四種)

第二 律旋(第二種)

の二種であります

第三節 又俗樂にて用ひてゐます音階は

第一 甲種(第七種)

第二 乙種(第三種)

の二種であります

第四節 古今東西雅俗の音樂にて更に用ゐざる様に考へらるゝ者は

第一 第五種  
の一種であります

第四章 長音階

第一節 長音階と申すは彼の全音五箇半音二箇が左圖の如き距離にて繼續する者であります

第十四圖

//2
1
1
1
//2
1
1

第二節 倍此長音階の階段に下方より上方に順次に(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(i)ある數字を排當しましてそれを各階の名稱と致します

第十五圖

1
7
6
5
4
3
2
1

第三節 倍又此音階は唯一七連音のみで止る者ではありませぬ前掲の者を基礎と致し或は上層に或は下層に幾層でも重ねる事が出来ます尤上層音階の階名にハ其數字の上方に一小黒點を記し下層音階の階名には其數字の下方に一小黒點を記します

附言 其より上層にても下層にても其層の増すに従ひ其數字の點も亦増して参ります

第四節 且つ此數字は音に其名稱と致すのみならず又音



ハ其音高低上の比較に都合の宜キハ所謂一得也又其口の開きの小さくあるのハ蓋し一失でもありまじよふ

第五章 七音の特性

第一節 此音階の各階は旋律上其々特別の役目を受持て居ります夫れ故又其々に特殊の性質即ち特別の役目を以て其名稱との致します

- 第一階 ハ 主和絃 TONIC
- 第二階 ハ 上主和絃 SUB-TONIC
- 第三階 ハ 中和絃 MEDIANT
- 第四階 ハ 次屬和絃 SUB-DOMINANT
- 第五階 ハ 屬和絃 DOMINANT

第六階 ハ 次中和絃 SUB-MEDIANT

第七階 ハ 導音 LEADING NOTE

第八階 ハ 主和絃 TONIC (第一階の循環せし者)

第一 主和絃ハ一樂曲旋律の基く所結局の收まる所實に一國否七音の帝王とも稱すべき者であります

第二 上主和絃は主和絃の直上に位する者であります

第三 中和絃は主和絃と屬和絃との中間に在る音で此音は或る學者の説に甘き音と申して旋律上和聲上共に随分必要の者であります

第四 次屬和絃ハ上の主和絃即ち第八度より完全第五度下方に位する者で又屬和絃に次で主和絃をハ善く奉

戴輔翼する者であります

第五 屬和絃ハ下の主和絃即ち第一度より完全第五度上方に位する者で實に主和絃との密接の關係を有ち其上此屬和絃ハ主和絃に對して恰も宰相とも稱すべき者で主和絃をハ善く奉戴輔翼する者であります

第六 次中和絃は主和絃と次屬和絃との中間に在る者で此音は屬和絃の直上に位します故佛蘭西にては上屬和絃 SUB-DOMINANT と申します

第七 導音ハ主和絃より上み長第七度に在り日耳曼に於てハ之を下半音 SUB-SEMI TONE と申し佛蘭西に於てハ感覺音 NOÛVE SENSIBLE と申します抑

第一 導音と申す理由ハ(6)より(i)に至る時其間に在りて之が經過を圓滑に致す意であります

第二 感覺音といハ人若し長音階を下より上方へ或ハ樂器にて彈するか或ハ音聲にて唱ふるか致して偶此音に至りますと忽ち腦裏に上み主和絃に是非共歸結する觀念を惹起す所以であります

第三 下半音と申すハ唯其音が上の主和絃より半音下に位するといふ所以であります  
ゆゑ斯くは名附し者でありますよふ

第六章 長音階及調子

第一節 今より音律と長音階と合同一致します模様を御






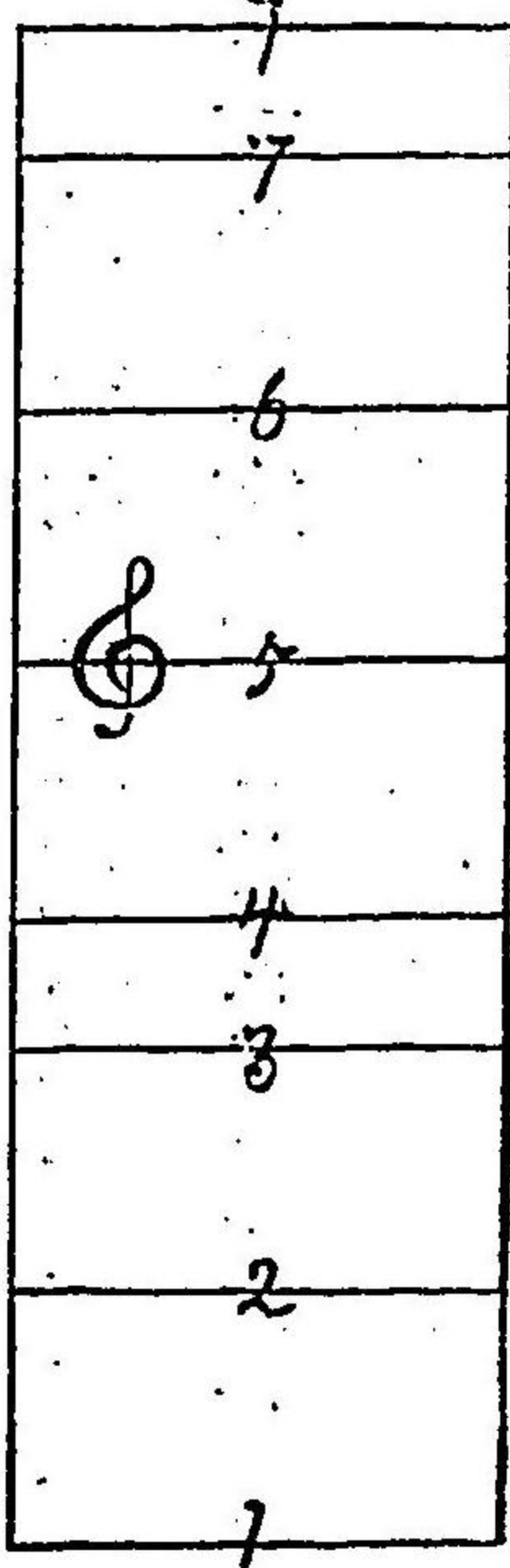
階を顯す事と致しますと頗る面倒でありませむから茲に  
 一種の簡便な方法を發明しました  
 其方法と申すは音律中の或る一音に一箇の記號を制し  
 其記號を音階中の或る一階に配し確と其階の音を定め  
 其他の諸階の音例之は(1)は何(2)は何(3)(4)(5)(6)(7)(i)は何  
 々と推測する事でありませむ尤此法を用ゐますに(は)(に  
 )(ほ)(へ)(と)(り)(ろ)(は)と申す調名の順序ハ苟にも御忘却あさ  
 れてハありませむ萬一此順序を御忘却あされませむと何  
 如にも音階中の一箇所ハ成程確に知れませむが其他の諸  
 階ハ何が何やら更に推測する事ハ出來ませんシテみま  
 すると前陳調名の順序は善く良く御注意御記憶あさる

のが肝要であります

第四節 今音階中の或る音に記號を定めますに

第一 先づ(と)調に  の如き記號を制します前圖の  
 音階によりませむ(5)が正に(と)調に當り居りませむ故(5)の  
 階に其所定の記號を置きます斯く致します以上は假令  
 其他諸階の調名は取除けませむも彼の調名の順序をだ  
 に御記憶あさるゝ限りは

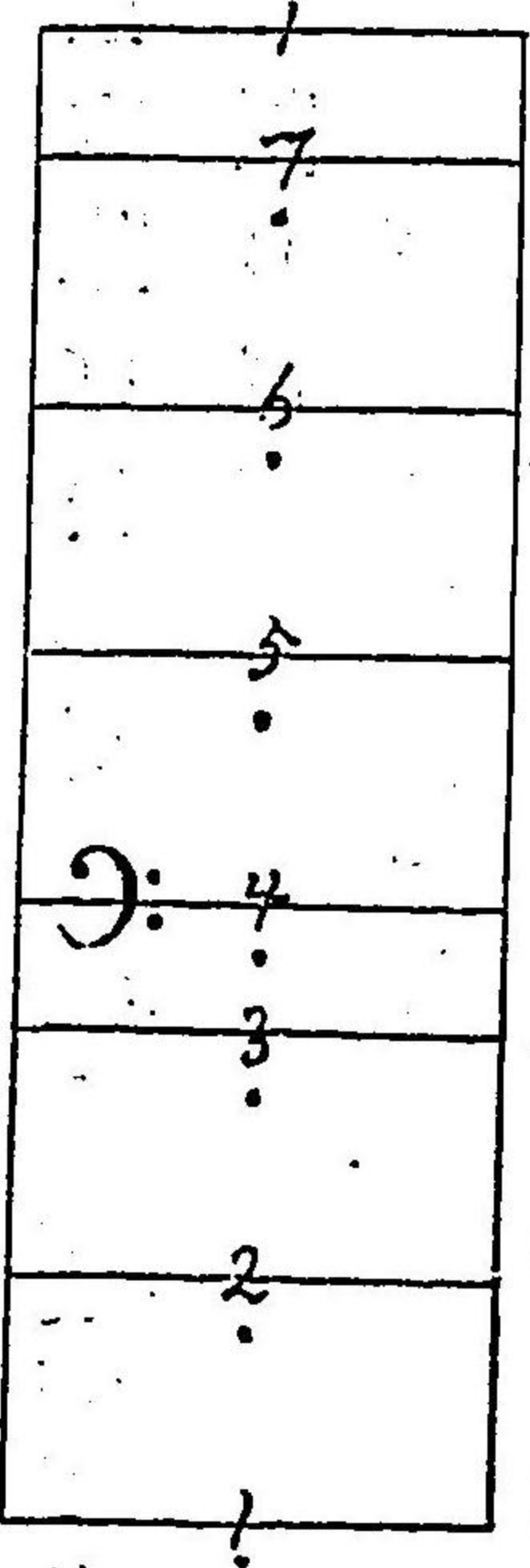
第十七圖



(1)ハ(は)(2)ハ(に)(3)ハ(ほ)(4)ハ(へ)(5)ハ(と)何と一々推測し得るで

ありまじよふ  
第二 次は(へ)調に J: の如き記號を制しますソユデ(4)を(へ)調に配當します故所定の記號を(4)に置きますと

第十八圖



(1)ハ(ハ) (2)ハ(ハ) (3)ハ(ハ) (4)ハ何と一々推測し得るでありまじよふ

第五節 前陳二種の記號の名稱は

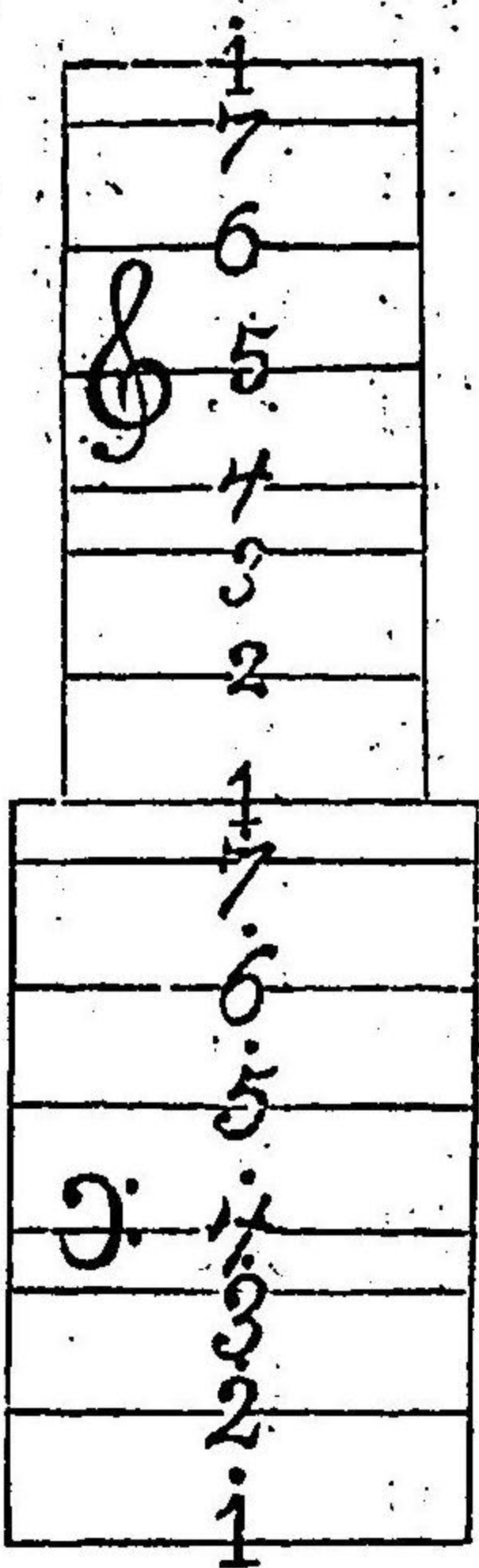
- 第一 (と)調の者を 高音部記號 TREBLE CLEF
- 第二 (へ)調の者を 低音部記號 BASS CLEF

と申します

附言 其他尙一種の記號がありますがそれは後篇にて御話しまじよふ

第六節 楮此二種の記號の關係は

第十九圖



の如く(へ)より(と)までの距離ハ長第九度の距りであります

第七章 短音階

第二節 長音階の御話ハ最早一通り済みましたから是より短音階の御話を致しまじよふが方今では短音階は長音

階に對して成立つ者であります

第二節 短音階には大別三つの種類があります

第一 自然的短音階 NATURAL MINOR SCALE

第二 和聲的短音階 HARMONIC MINOR SCALE

第三 旋律的短音階 MELODIC MINOR SCALE

第三節 借自然的短音階ハ全く短音階の本源であります  
シテ此短音階の長音階に對しますのは二様あります

第一 關係短音階 RELATIVE MINOR SCALE

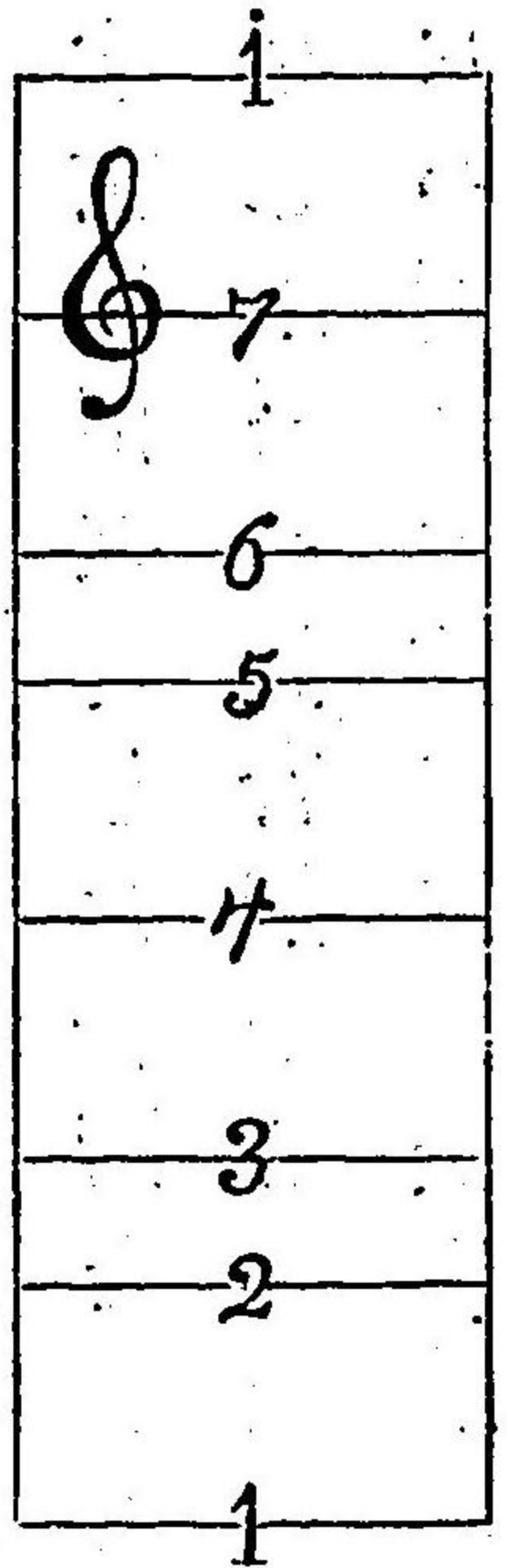
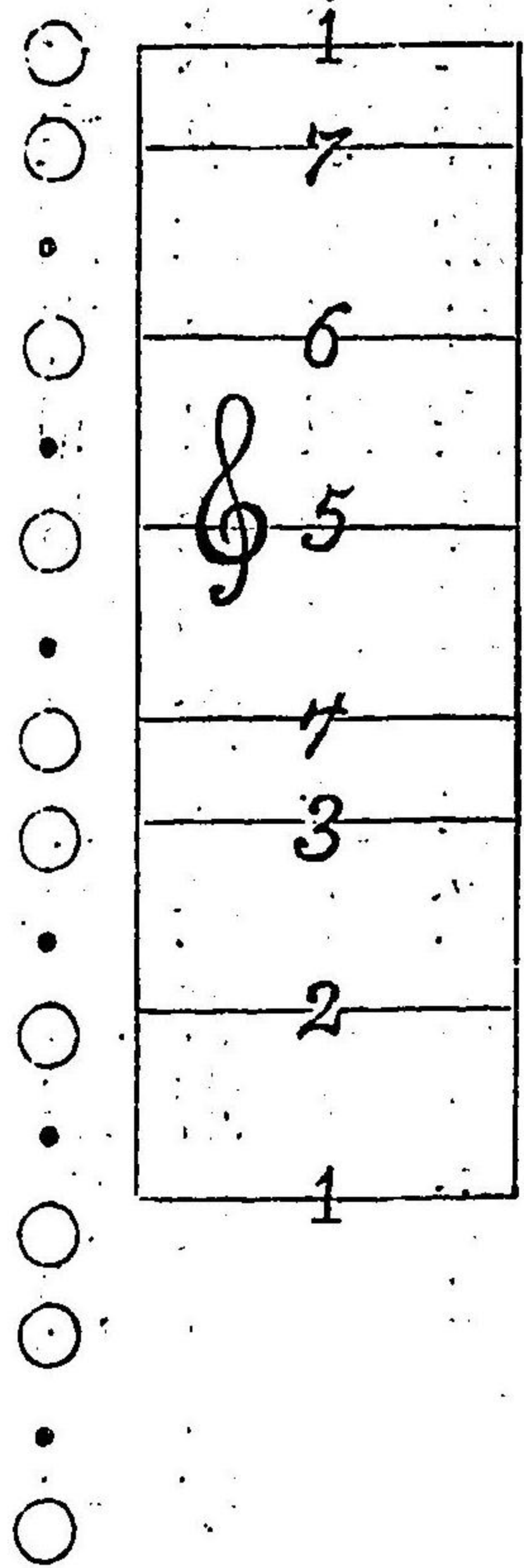
第二 同調短音階 SAME TONE MINOR SCALE

と申します

第四節 關係短音階とは例之ハ茲にハ調長音階がわります

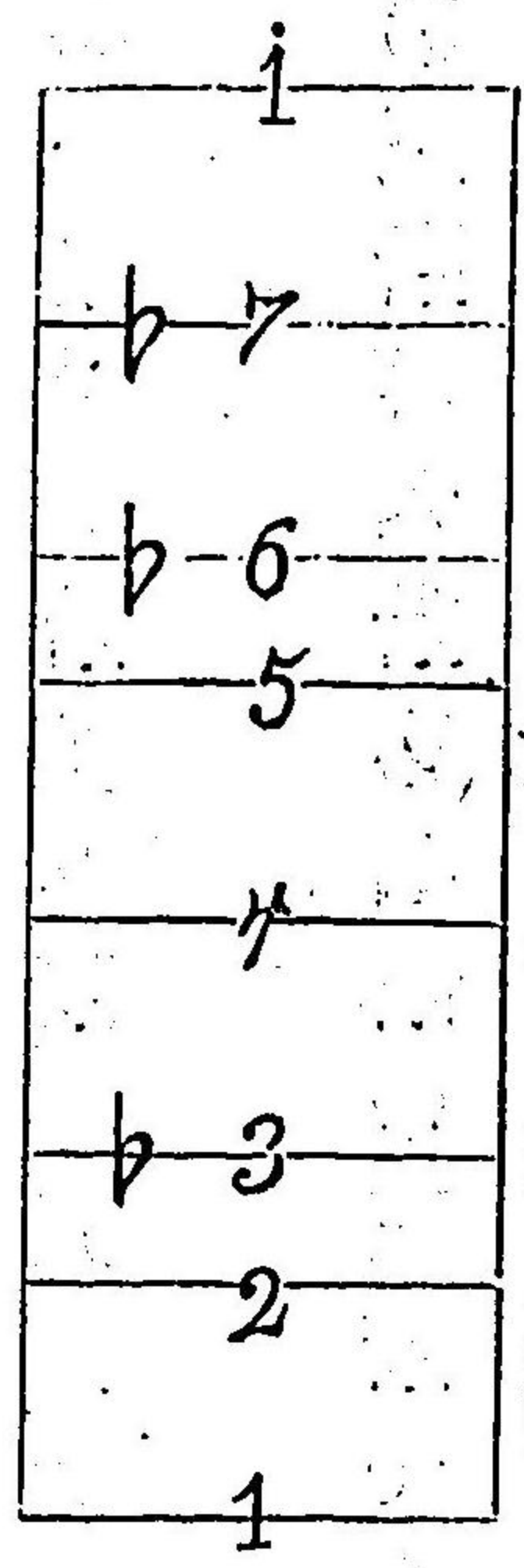
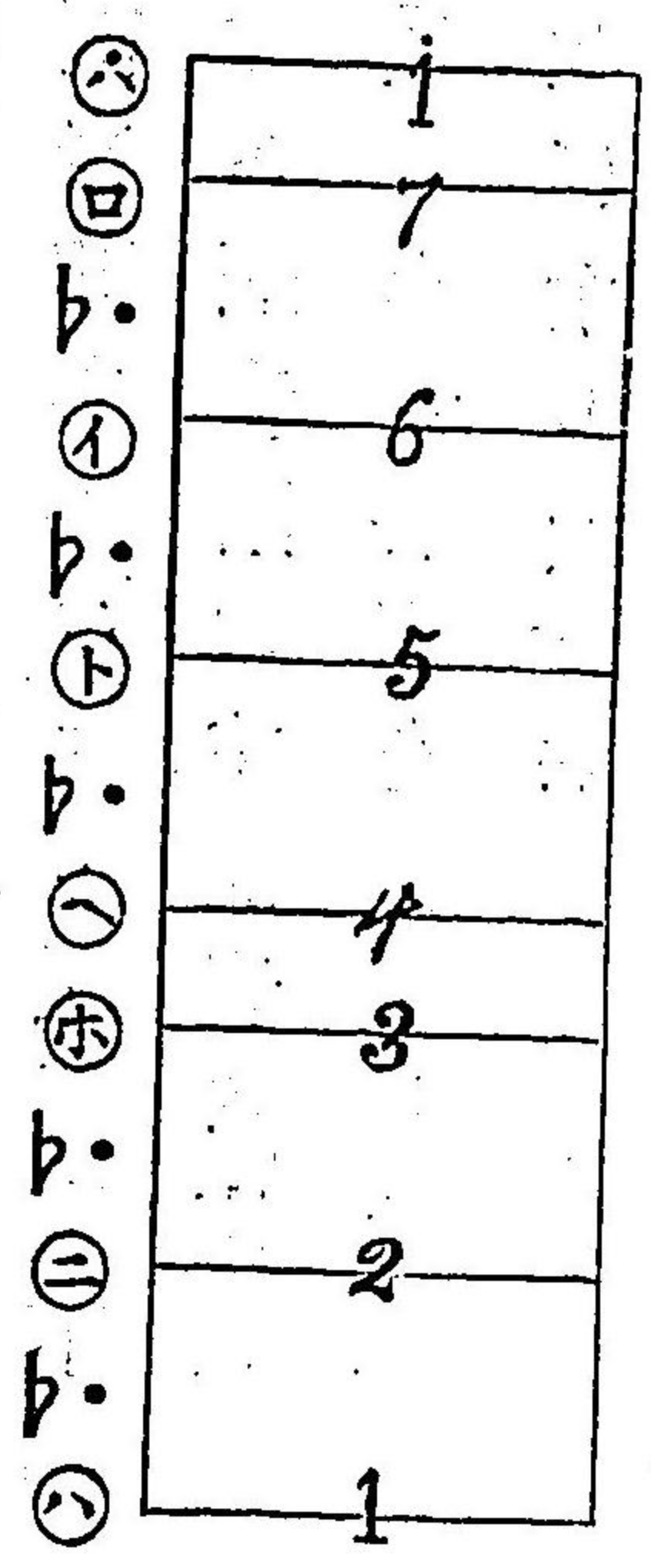
すと其長音階の主調音即ち(1)はより短三度下即ち下音階  
の(6)(5)をば今構造する短音階の主調音と定めまして其よ  
り段々と上の方へ長音階の各音を採用しまして其第八度  
即ち長音階の第六度に至りますと

第二十圖



一種の音階が出来ます茲に出来ました音階を名て(は)調長音階之關係短音階と稱し階名ハ長音階のを其儘用ゐます  
 第五節 同調短音階との例之ハ茲に(は)調長音階がありすと其長音階の主調音即ち(1)はを其儘短音階の主調音と定めまして是より段々と上の方へ長音階の各音中(3)(6)(7)の三音のみ半音下けて短音程と致し其他の各音即ち(1)(2)(4)(5)ハ総て長音階と全く同一に致しますと

第廿一圖



別に前の短音階と異形同種の音階が出来ます其出来ました音階をは名て(は)調長音階之同調短音階とは稱します  
 第六節 諸君已に關係同調の二箇の短音階をハ御承知に成りし上は是より長音階と短音階との異同の大畧を御話致しましよふ其話を致すには長短二音階の各音をは一々對照比較するのが一番明瞭だらふと考へますから其對照表をバ左に掲げます(但表中短音階の所にて括弧の附きましたものハ長音階と相異なる者であります)

階音短	階音長	階音段
度一第正中	度一第正中	階一第
度二第長	度二第長	階二第
(度三第短)	度三第長	階三第
度四第全完	度四第全完	階四第
度五第全完	度五第全完	階五第
(度六第短)	度六第長	階六第
(度七第短)	度七第長	階七第
度八第正中	度八第正中	階八第

第七節 前掲の表に就て觀ますと長短二音階の  
 第一 同一點ハ第一階、第二階、第四階、第五階、第八階の五階であります  
 第二 相異點ハ第三階、第六階、第七階の三階であります

第八節 シテみよすと第三、第六、第七音の三音が主調音より  
 第一 長音程である時ハ其音階は長音階で  
 第二 短音程である時ハ其音階ハ短音階であります

第九節 されハ此三音ハ實に音階の長短を區別するたりの標準音とも稱すべきものであります故各けて旋法音モト DAL NOTE とハ申します

附言 第三音ハ何如ある場合にてハ決して轉することはありません苟にも其音階が短音階であります以上は其音程は必ず短音程であります第六音は少しは變する場合もありますが第三音に次で先々目當にある旋法音

であります然るに第七音に至りてハ常に轉する者でありまして殆んど旋法音の資格ハあらざる程の者でありますシテ觀ますと旋法音は唯第三第六の二音のみと見ても宜しからふかと思ます

第十節 此自然的短音階に於きましては第七度と第八度の間が一音でありますゆゑ長音階の彼の導音とも稱すべき者がありません西洋人が若し斯音階を唱ひますには甚だ困難を覺へ其上頗る不快を感ずるとか申すことで御座います

第十一節 ソコデ此短第七度を半音階的半音上げて長第七度とあしきすと茲に一種特別の短音階が出来ます此短

音階をハ和聲的短音階 HARMONIC MINOR SCALE と申します

第廿二圖

#	1/2
	1/1/2
	/
	/
	/
	1/2
	/

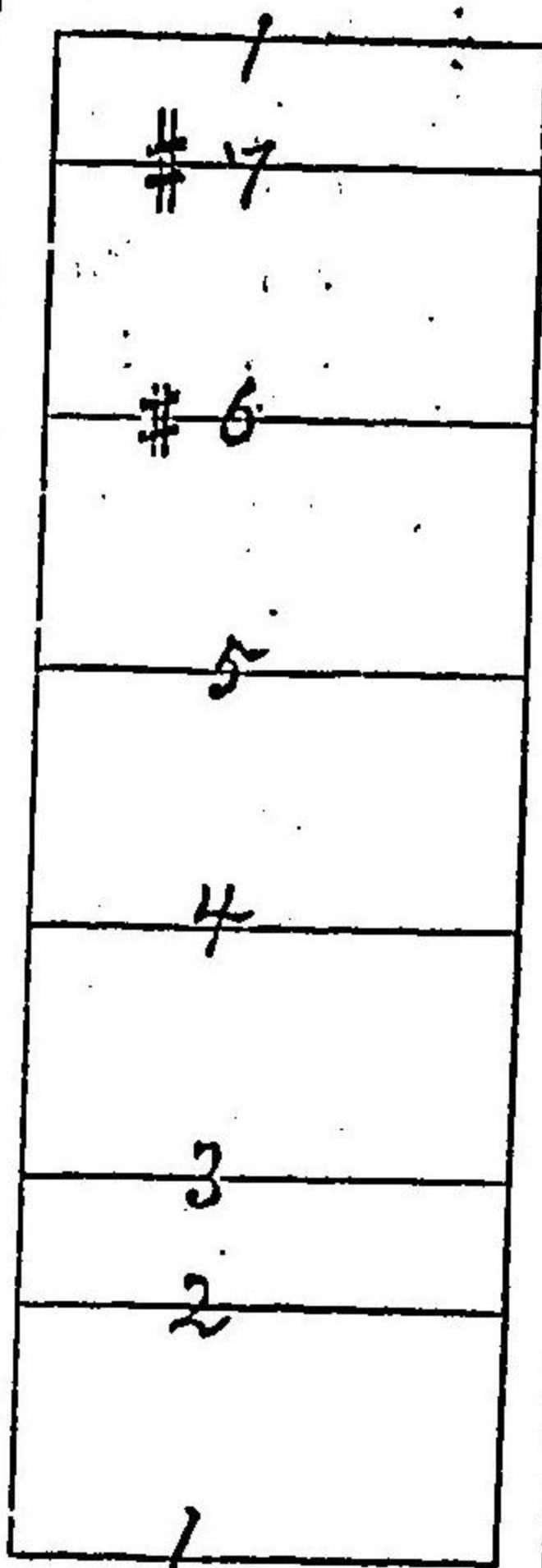
第十二節 倍彼自然的と此和聲的との二つの短音階の對照の圖を左に掲げて御覽に入れます

第廿三圖

1	/	#	7	1/2
7	/			1/1/2
6	1/2	6		1/2
5	/	5		/
4	/	4		/
3	1/2	3		1/2
2	/	2		/
1	/	1		/



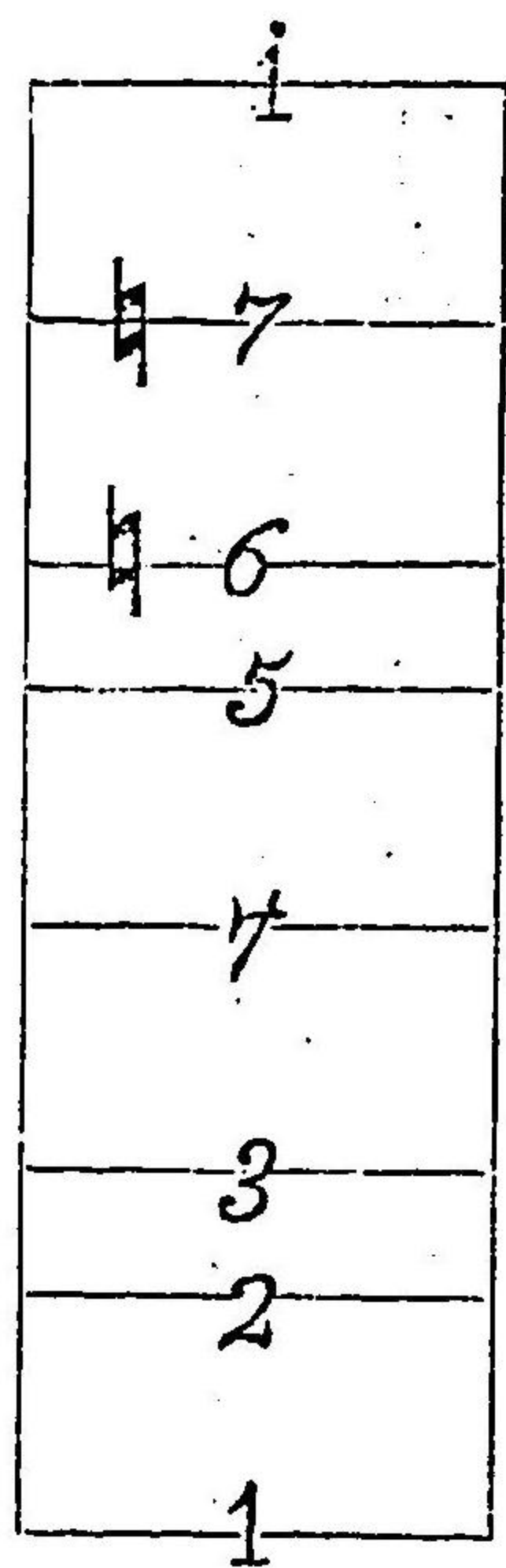
第廿四圖



第十五節 斯短音階ハ唯上行する場合にのみ用ゐる者でありまして下行するときには用ゐるませむ其譯何如とされバ下行の際には第七第八の中間必きしも半音あることば要しませんシテみますれバ第七度ハ自然的の時の様に短第七度にて宜しく第七度が短音程とある以上は第六度は勿論短音程にて宜しい譯であります第六第七の二音共に短音程とある時は自然的短音階と全く同じ物の様であります然し第六と第七との二音一旦上りし以上は假令下行

に於きまして各其本位に復せしとは申しあがら全く純然たる自然的短音階と見做すことは出来ません實に斯音階は旋律的下行短音階 メロディック・デセンドイング・マイノール・スケール MELODIC DESCENDING MINOR SCALE と稱します

第廿五圖



附言 嬰あり變ありの記號が一旦附きし者は其本位に復する時還位記號と稱する  の如きものを記します

第八章 呂旋及律旋

第二節 本邦にて雅樂と稱します者は多くは支那の古代



の音楽であります故旋法即ち音階も亦多くは其製定に係る者であります今日本邦にて用ゐます雅樂の旋法には

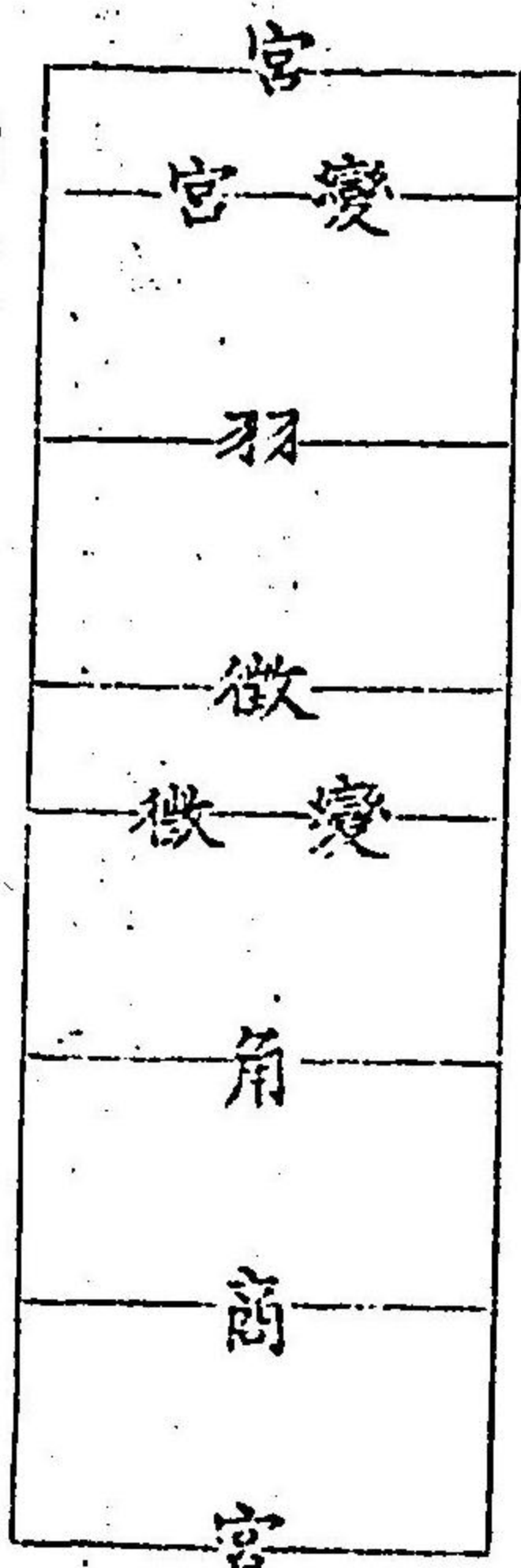
第一 呂旋

第二 律旋

の二種であります

第二節 左に呂律二旋法の圖式を掲げましょふ

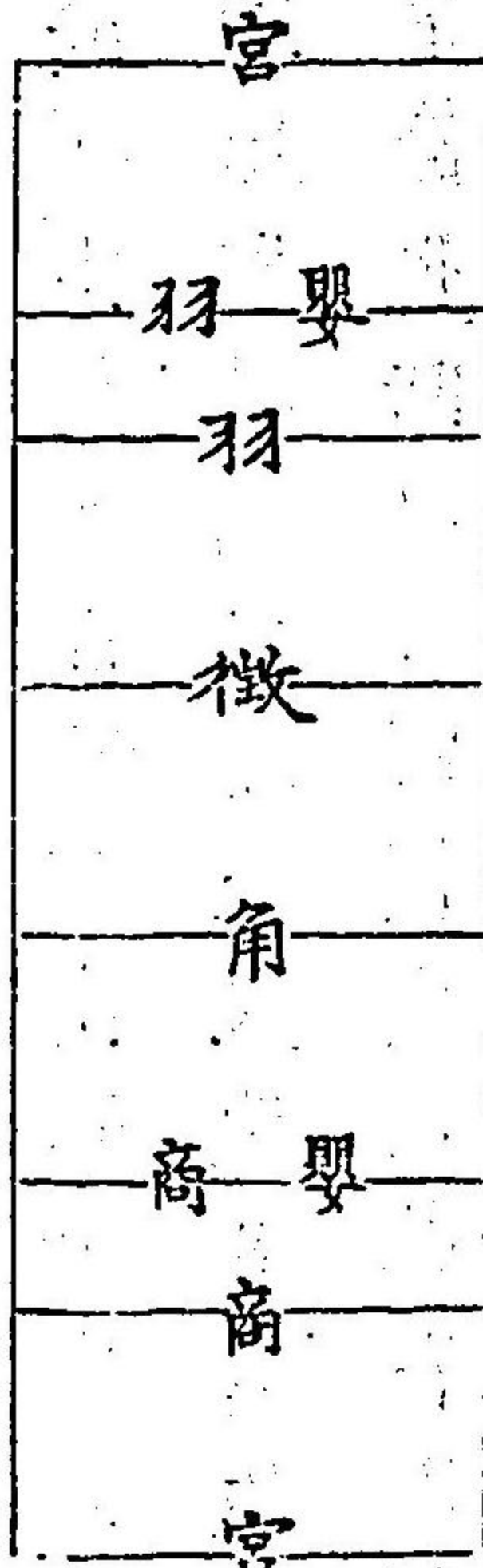
第一 呂旋



第二 律旋

第廿六圖

第廿七圖



第三節 倍支那太古に於きましては其旋法は僅に五聲でありましたが其後、周の文王武王の時に至りて二變と申すことが出来たとか申します

第一 五聲は 宮、商、角、徵、羽

の五個でありますシテ此五聲は呂律二旋法共に其名稱は同様であります

第二 二變は

(1) 呂旋には變宮、變徵

(2) 律旋には嬰商、嬰羽

百二十

の二箇であります。是に於てか二旋法共今日の如く遂に七聲とはありました。

附言 御参考の爲め五聲の名義の荒増を鳥渡御話致し  
ましよふ杜氏通典曰。五聲者。一曰。宮。宮者。義取宮室之象。所  
以安容於物。宮者。土也。土亦無所不容。故謂之宮。又宮者。中也。  
義取中和之理。其餘四聲而和調之。二曰。商。商者。金也。金堅強  
故名之。亦當時物皆強堅成就之義也。三曰。角。角者。觸也。言時  
萬象未生。陽氣觸動而出。角者。從地而出。觸動之義也。四曰。徵。  
徵者。止也。言物盛則止。象陽氣盛而止。又徵者。火也。火生炎盛  
之義也。五曰。羽。羽者。舒也。時陽氣將復。萬物孳育。而舒生也。云

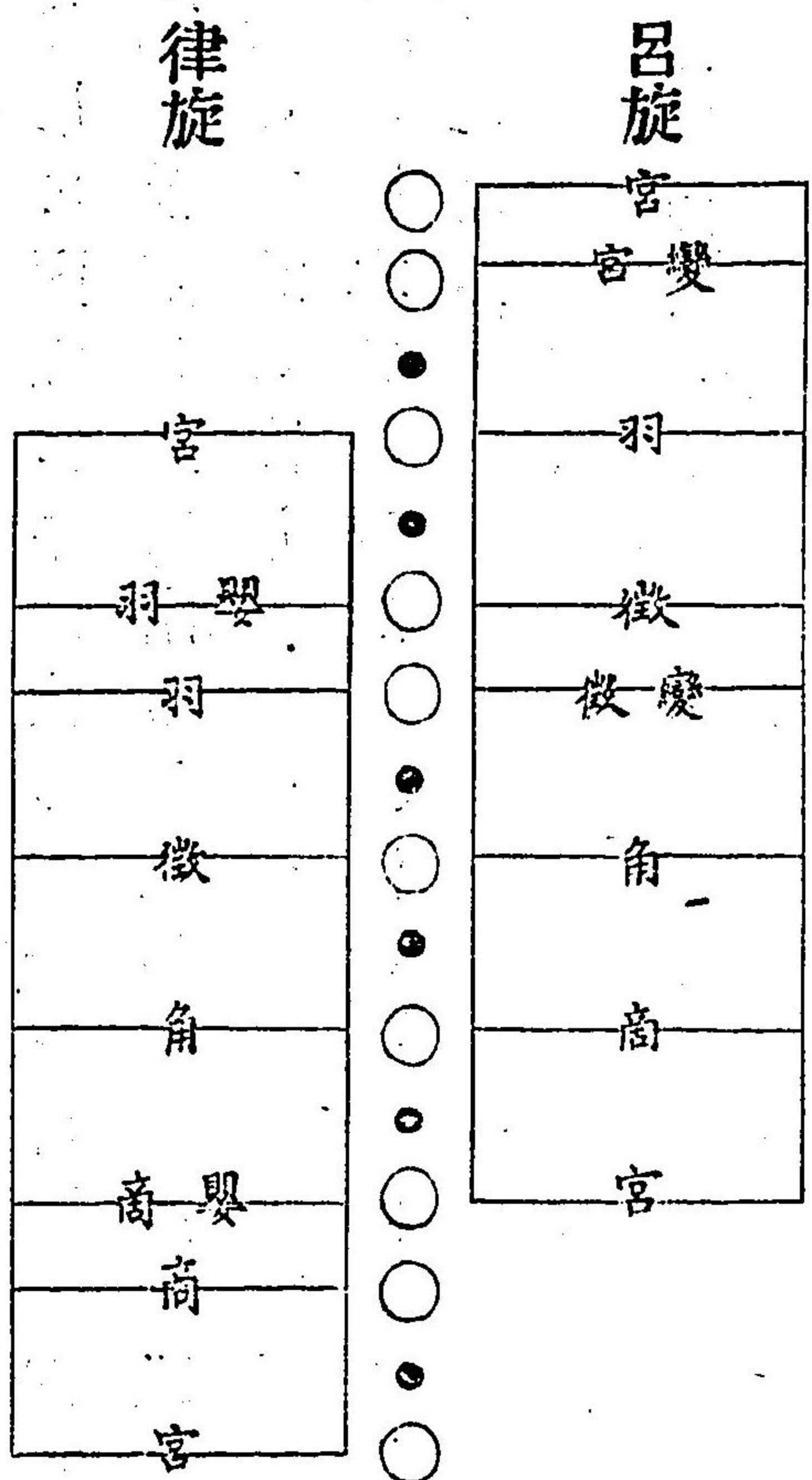
々 ○樂記曰。宮爲君。商爲臣。角爲人。徵爲事。羽爲物。五者不亂。  
則無怙懣之音矣。宮亂則荒。其君驕。商亂則陂。其臣壞。角亂則  
憂。其人怨。徵亂則哀。其事勤。羽亂則危。其財匱。五者皆亂。迭相  
凌謂之慢。如此則國之滅亡。無日矣。◎蔡元定曰。宮與商。商與  
角。徵與羽。相去各一律。至角與徵。羽與宮。相去乃二律。相去一  
律。則音節和。相去二律。則音節遠。故角徵之間。近徵收一聲。比  
徵少下。故謂之變徵。羽宮音間。近宮收一聲。少高于宮。故謂之  
變宮。變宮變徵。宮不成宮。徵不成徵。古人謂之和繆。所以濟五  
音不及也。變聲非正。故不爲調也。○通典注曰。自段以前。但有  
五音。自周以來。加文武二聲。謂之七聲。五聲爲正。二聲爲變。變  
者和也。○蔡元定曰。左氏所謂七音。漢前志所謂七始。是也。○

百二十一

又其他諸書に種々様々の説はありますが随分其中には  
 牽強附會今日科學を研究する者の眼より觀ますと實に  
 可咲か者があります例之は此五聲を四季に配當したり  
 或は五行に或は五臟に或は五常に或は五色等に配當し  
 て若し旨くあてはまると昔の支那人の癖として非常か  
 喜びにて「そら御覽あさい此五聲は斯様に何にでも歟で  
 もあてはまるではありませんかそれだからふんど貴ひ  
 ものではありませんか」杯と獨りで高尚がつて居るのが  
 通例であります然し今日では此等の説は餘り面白くも  
 なく唯繁雜を感じるのみでありますから鳥渡御參考ま  
 での御話して置くのであります

第四節 本邦の呂律二旋法の關係は不思議の者で呂旋を  
 西洋の長音階と見做しますと律旋は恰も其短音階の如き  
 關係であります

第廿八圖



此圖に就て觀ますと西洋の短音階は其主調音を長音階の

主調音より短第三度下に定め順次上方に天然音のみを採りて構造致せしと同様に今律旋の宮音を呂旋の宮音の短第三度下に定め前陳長短音階の比較の時の如く致しますと其關係は全く其時と同じ有様であります  
 第五節 今試みに本邦の呂旋と西洋の長音階とを同調に對照して觀ましよふ

第廿九圖

長音階	1	1/2	呂旋宮	1/2
	7	1	宮變	1
	6	1	羽	1
	5	1	徵	1/2
	4	1/2	徵變	1
	3	1	角	1
	2	1	商	1
	1		宮	

此圖に就て觀ますと呂旋と長音階とは唯一箇所の相異即ち長音階の次屬和絃(4)と呂旋の變徵と僅に半音の上下あるのみで其他ハ総て一致して居ります  
 第六節 又試みに本邦の律旋と西洋の自然的短音階と同調にして對照して觀ましよふ

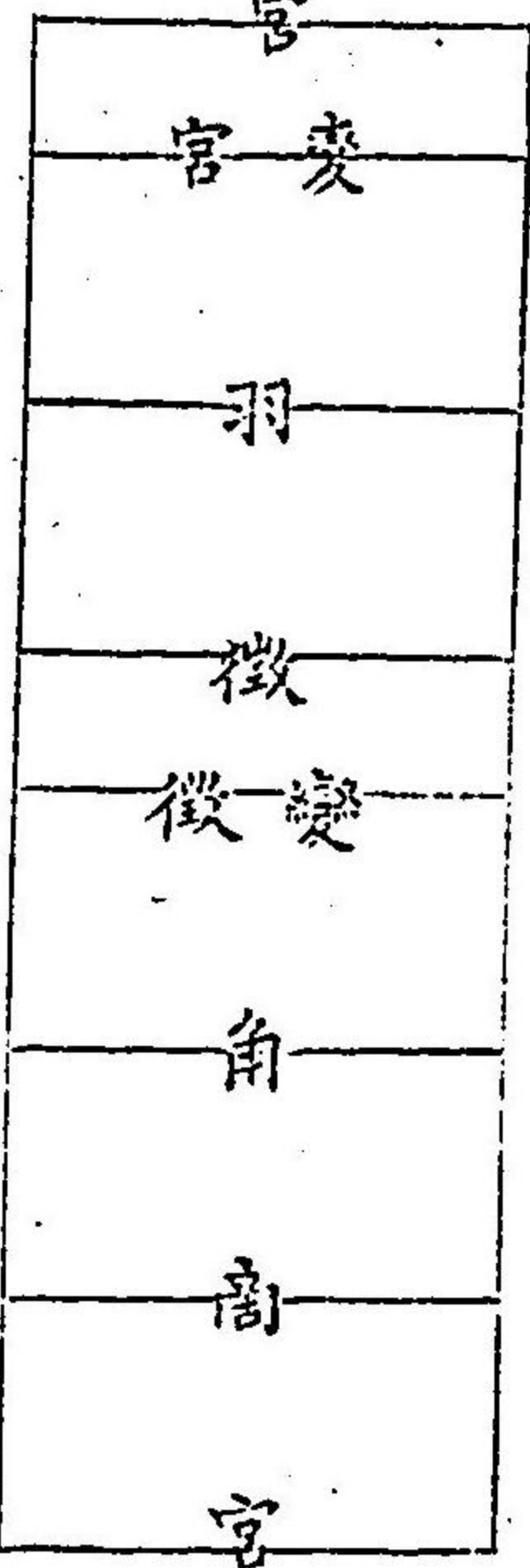
第三十圖

短音階	1	1	律旋宮	1
	7	1	羽嬰	1/2
	6	1/2	羽	1
	5	1	徵	1
	4	1	角	1
	3	1/2	商嬰	1/2
	2	1	商	1
	1		宮	

此圖に就て觀ますと律旋と短音階とは唯一箇所の相異即

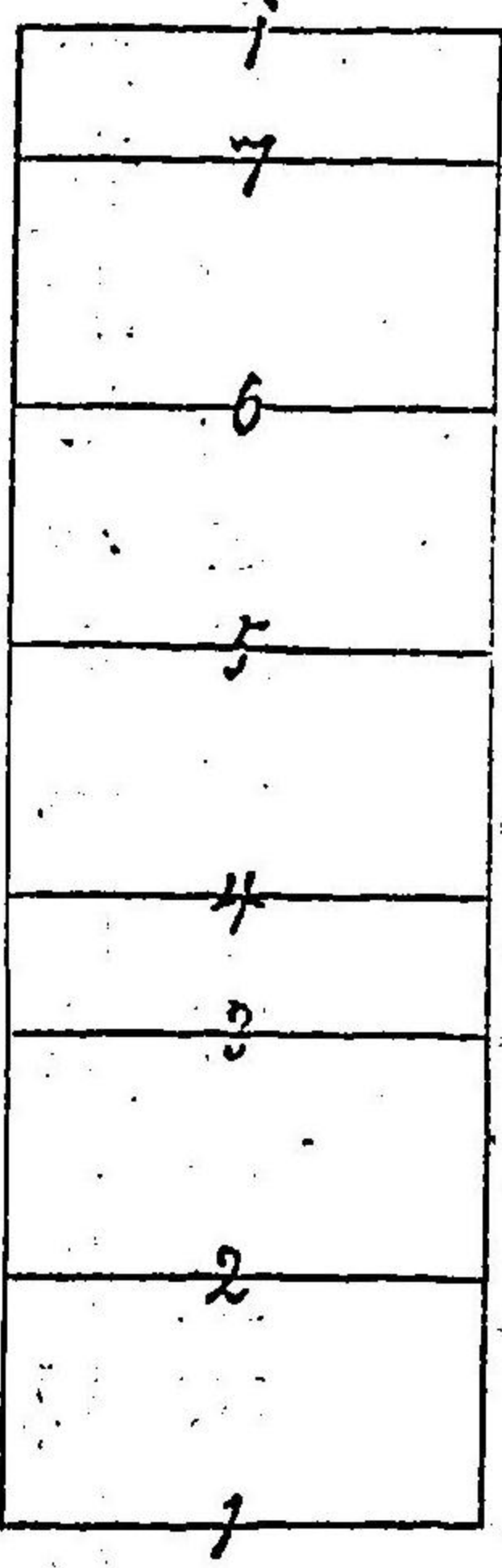
ち短音階の次中和絃(6)と律旋の羽と僅半音の高低あるのみで其他ハ総て一致して居ります  
第七節 又試みに本邦呂旋と西洋の長音階と關係調に對照して觀ましよふ

呂旋宮



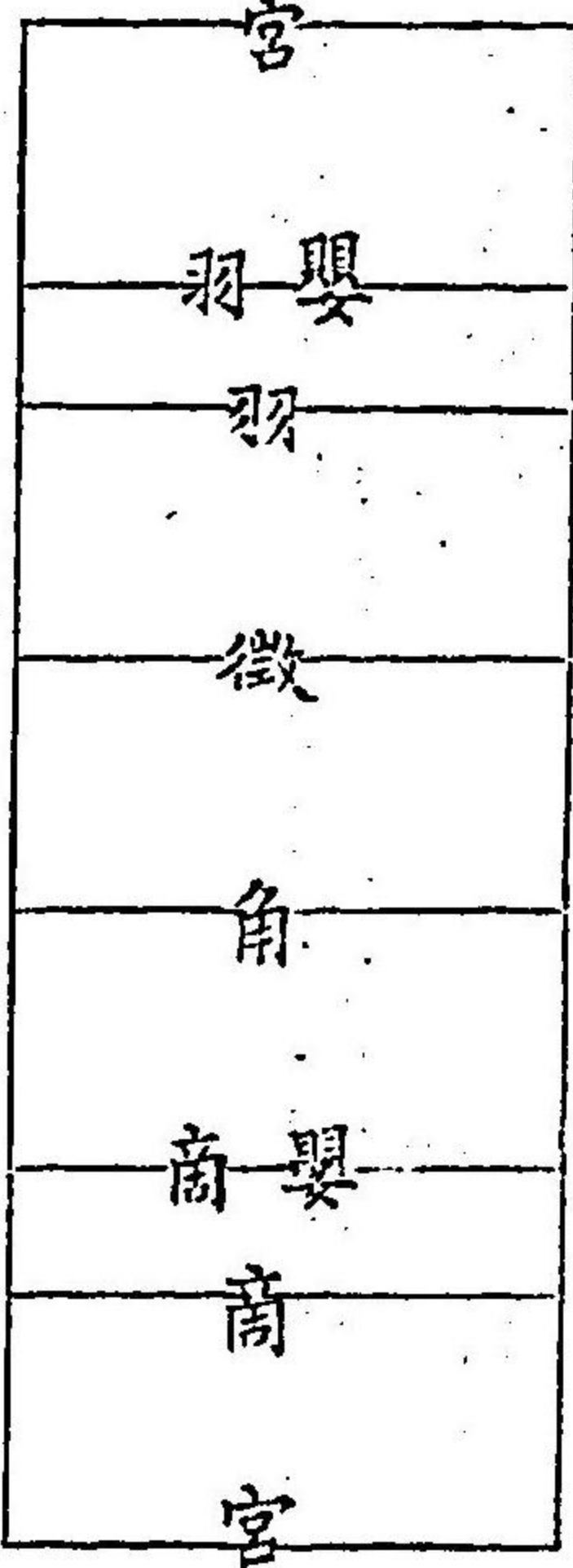
第卅一圖

長音階



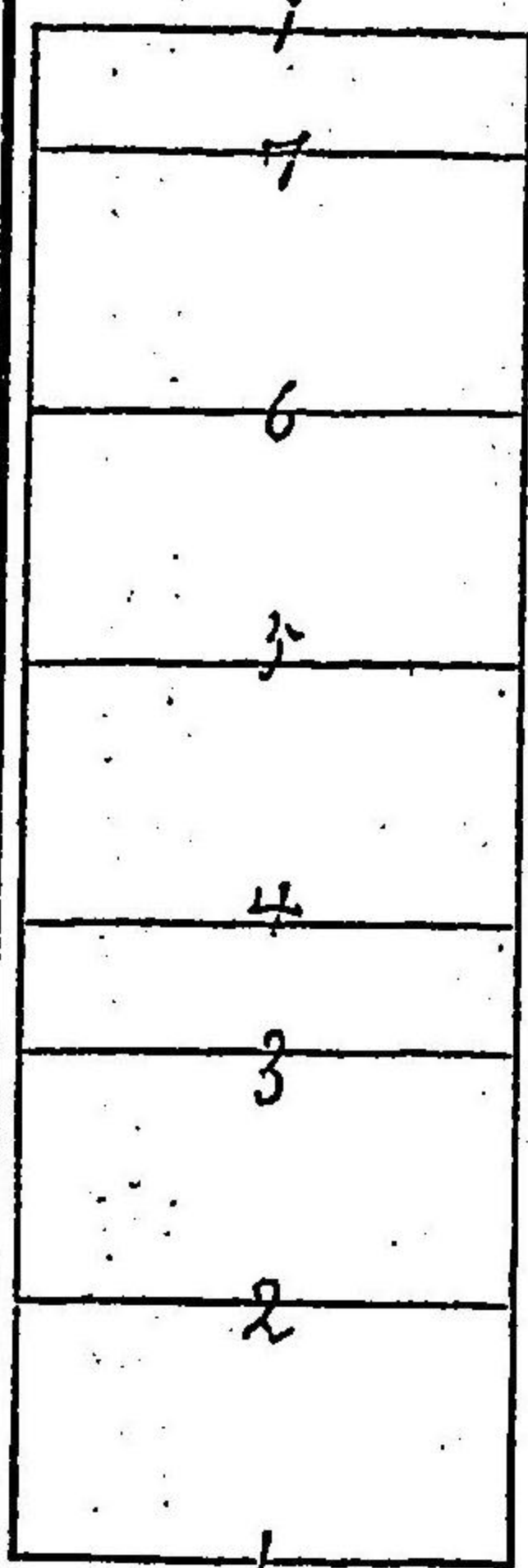
此圖に就て觀ますと呂旋宮音ハ長音階主和絃より完全第四度上の上に在ります  
第八節 又試みに本邦律旋と西洋の長音階と關係調に對照して觀ましよふ

律旋宮



第卅二圖

長音階



此圖に就て觀ますと律旋の宮音は長音階の主和絃より長  
第二度上の方に在ります

附言 前の二節ハ本邦雅樂風の音樂を西洋の譜に記す  
時御參考あさるに都合の宜い様鳥渡御話致したもので  
あります

第九節 呂律の二旋法を西洋の短音階と對照すへきであ  
りますが其ハ別段必要でもありませんから畧します

第九章 俗樂之音階

第一節 愈是より本邦俗樂之音階の御話を致す事とあり  
ましたが諸君も已に御承知の通り從來日本にて俗樂でも  
致す者杯は更に學問氣もありませんで所謂科學的思想ハ

樂に致したくもこれあき程でありました故彼の長短音階  
とか又彼の律呂旋法とか云ふ様な音階上の研究の様が小  
六ヶ敷き事ハ皆無と申しても恐くハ誣言でハありますま  
い

第二節 其上音樂の未だ上進せざる國にハ絃樂器杯に於  
きましてハ其絃之調子と其樂之音階とハ兎角混合致して  
居ります既に西洋にても上古の音樂ハ絃之調子ハ即ち樂  
之音階と申す様ありました其後漸々世の開明  
に趣くに隨ひ音樂も亦技術進み學理も開けて参りました  
今日に至りましてハ絃之調子ハ絃之調子樂之音階ハ樂之  
音階と判然區別が立ちて参りました西洋ですら其音ハ已

に斯様有様でありましたから日本の俗樂杯に於きましてハ勿論斯等取調の届かざるのハ理の當然で何にも不思議事ハありません

第三節 然る處現今文部編輯局長日本音樂會の幹事伊澤修二先生が曾て音樂取調掛長の頃古今東西の音樂の理論を所謂科學的に研究せられましたたが其時種々面白き事を發見されました其中で殊に本邦俗樂の音階を發見せられたし事の如きは後世本邦音樂歴史中に一大發見として掲ぐべき事でありますシテ其發見されし事實ハ明治十七年二月中大木文部卿閣下に上申されし音樂取調成績申報書中に詳かに載せてあります

第四節 今私は専ら伊澤先生の卓見に基いて御話致す事としましょふから先づ申報書中の要點を摘み左に掲げて諸君の高覽に供します其七十五葉に云く

凡そ音階の研究に就て一困難ハ宮たるべき音を發見するの難きはあり西洋の如く音階の正しく確定せる所にては其事たる甚だ容易ありと雖本邦俗曲にては未だ音階の一定せるところを發見せざるを以て甚だ之を難とす熟古今を歴觀するに我俗曲に於ても亦多くは宮音を以て始り宮音を以て終る者の如し假令或ハ宮を以て始らざるも宮を以て終るあり蓋し從來研究したる所に於ては俗曲の宮は西樂ハ調音階の(ロ)に當る者とす

とあります

第五節 又私の鄙見に於きまして凡そ一國の音楽には前に御話致せし七旋法中少くとも必ず二種の音階はある者の様に考へます前章にも已に述べた通り西樂に於きましては長短の二音階、雅樂に於きましては律呂の二旋法あるでありましょふ其様に西樂雅樂果して二種の音階あります以上は俗樂にも亦必らず二種あるべきは蓋し必然の事實と考へます

第六節 伊澤先生が申報書中に説明されしにも已に二音階ありますシテ其二音階とは則ち

第一には

第卅四圖

7	1
6	1
5	1/2
4	1
3	1
2	1/2
1	1

是れハ申報書には(甲)と印が附いてゐる者であります

第二には

第卅五圖

7	1
6	1
5	1/2
4	1
3	1
2	1/2
1	1

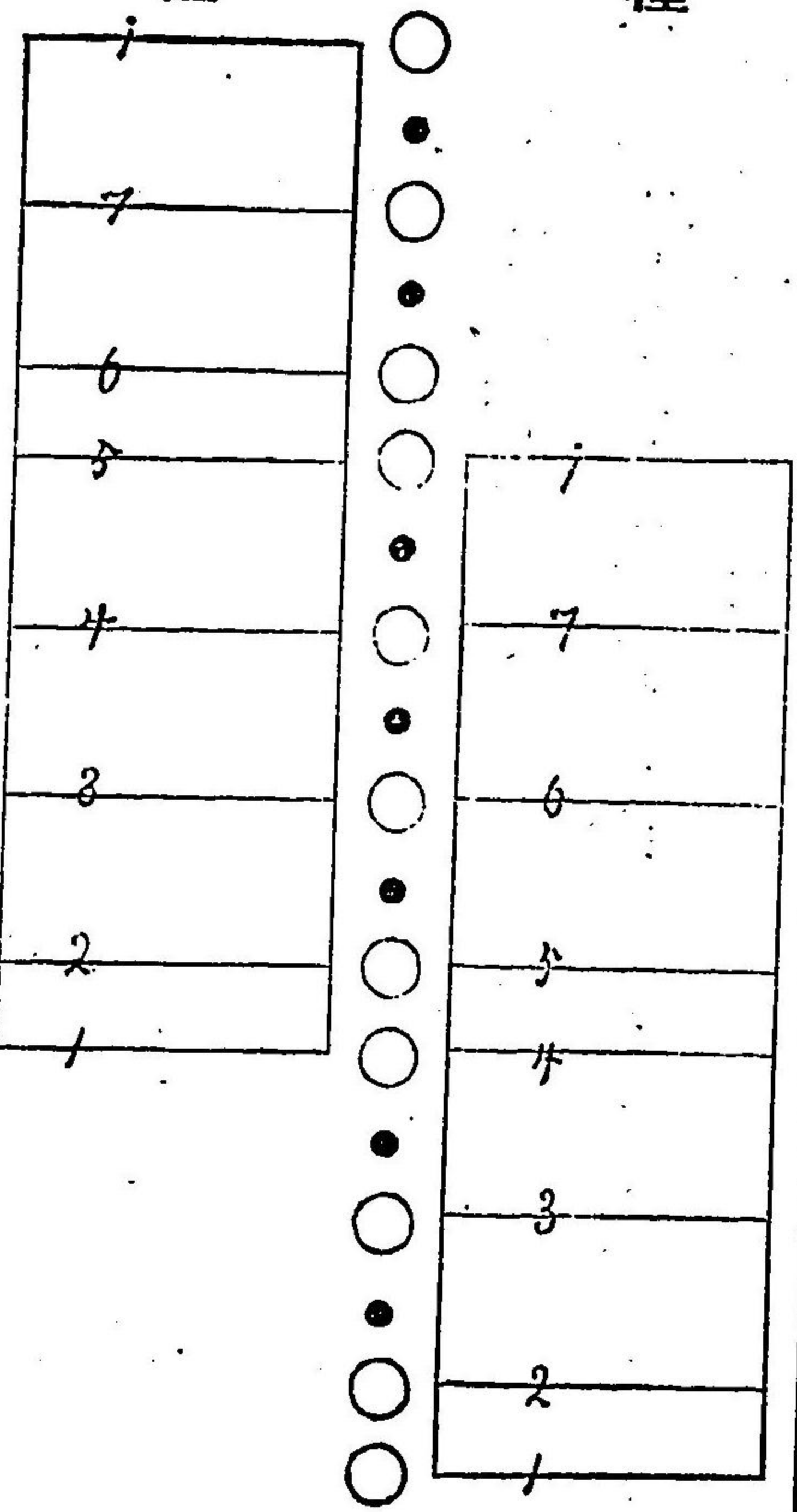
是れは申報書には(乙)と印が附いてゐる者であります

第七節 前に長音階と短音階と比較致した様に今此二音階を關係調にして對照しますと



甲種

第卅六圖



とありますソコテ其主調音は互に完全第四度の關係に在ります(但甲種の主調音(ろ)あれば乙種のハ(ほ)であります)第八節 前に長音階と短音階と比較致した様に又此二音階を同調にして對照致します

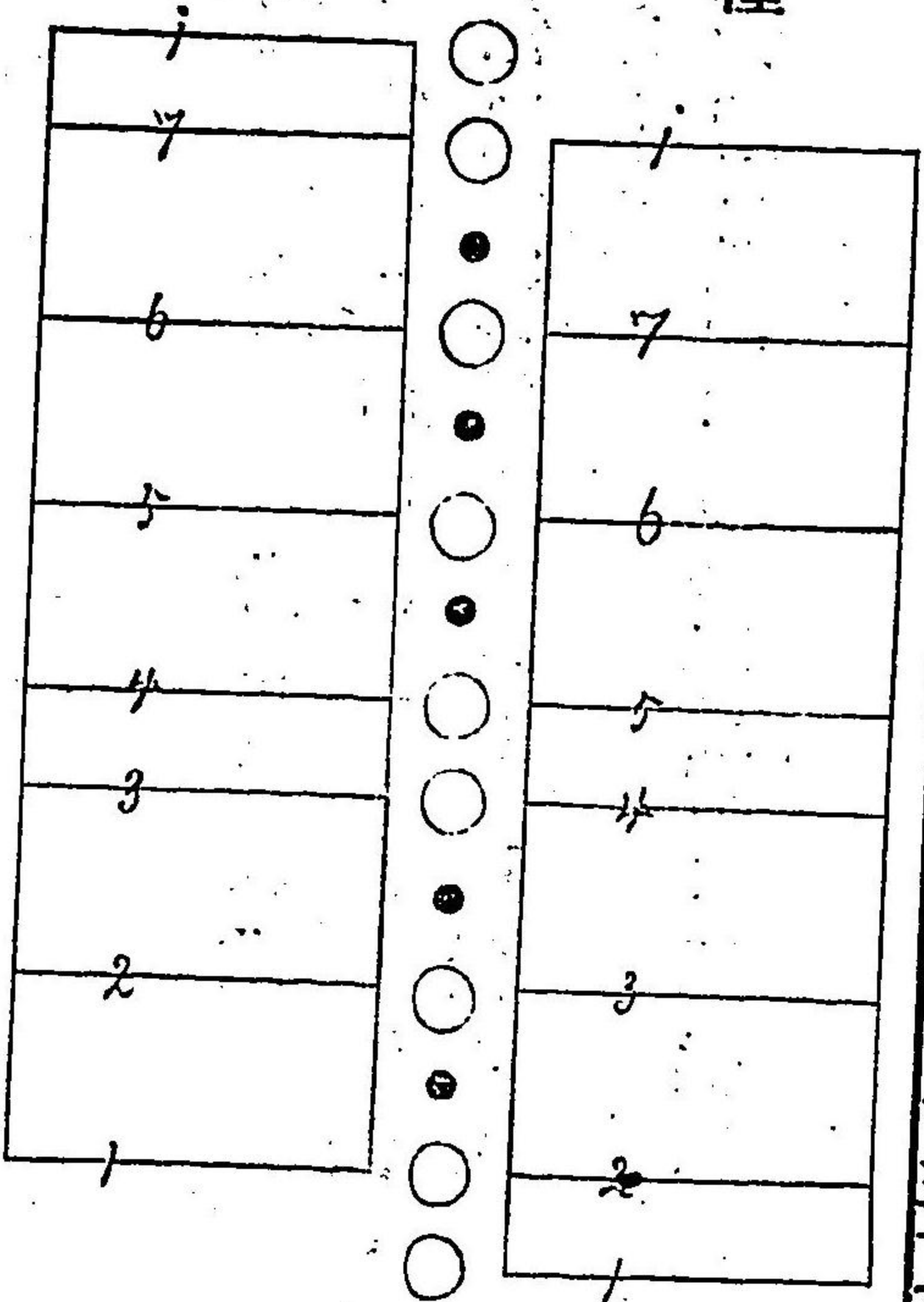
第卅七圖

1	1	1	1
7	1	7	1
6	1/2	6	1
5	1	5	1/2
4	1	4	1
3	1	3	1
2	1/2	2	1/2
1	1	1	1

とありますシテ又此二音階の各階を比較致して觀ますと其相異なる點は唯其第五階が(甲)に於ては半音低く(乙)に於ては半音高く其關係は實に僅々半音の高低あるのみで其他は總て同じ事であります第九節 今甲種の音階と西洋の長音階と關係に對照して觀ますと

甲種

第卅八圖

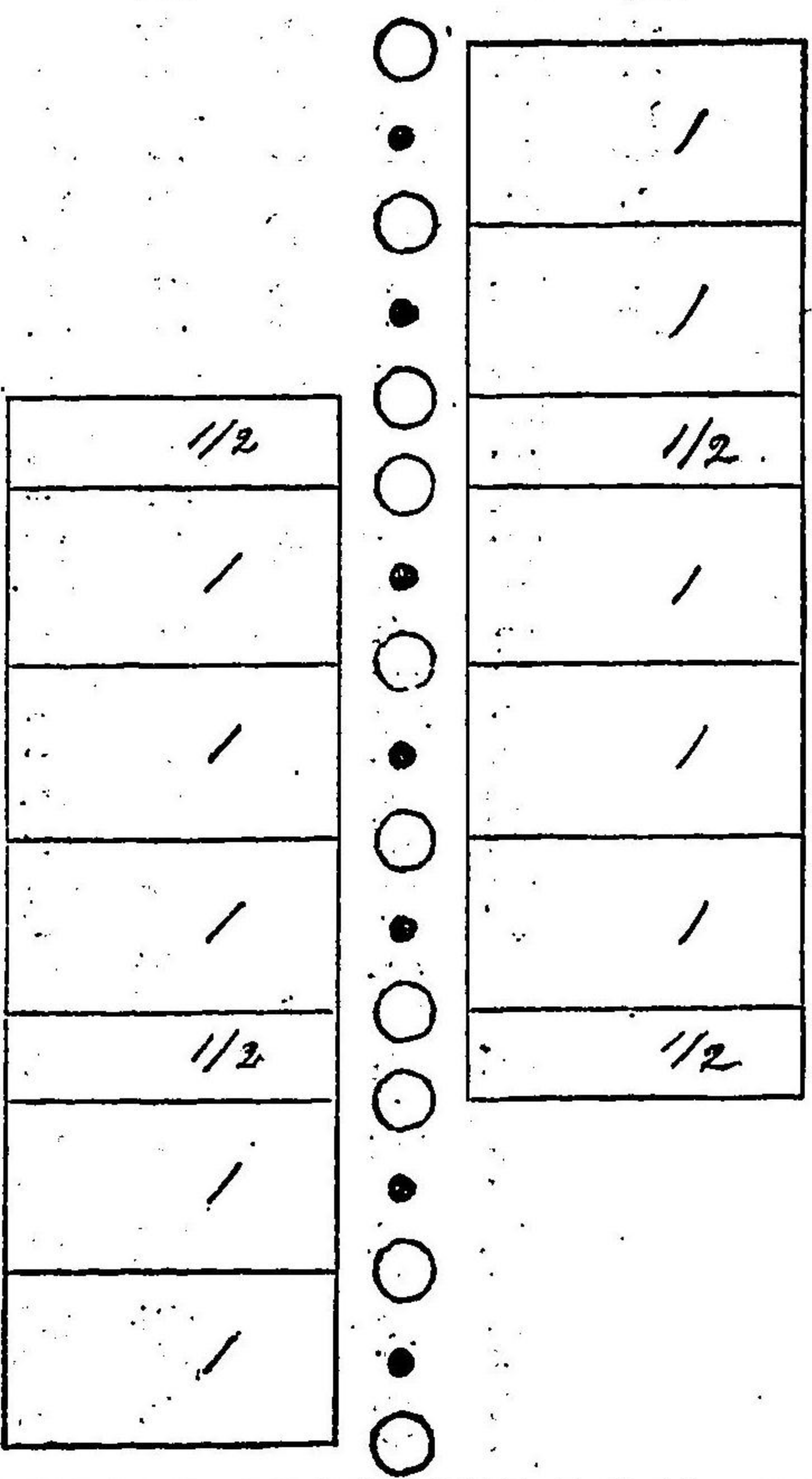


此圖に就て觀ますと其主調音は互に僅短第二度の相異であります(但長音階の主調音は)あれば甲種のみ(ろ)であります第十節 又乙種の音階と西洋の長音階と關係調に對照して觀ますと

乙種

第卅九圖

長音階



此圖に就て觀ますと其主調音は互に長第三度の關係であります(但長音階の主調音は)あれば乙種のみ(は)であります附言 乙種の音階には不思議なことが一つあります此音階の音程ハ西洋の長音階と全く反對の順序より成立

て居ります諸君宜しく御注目あさいまし

第十一節 又俗樂の音階に就きましては私の學友上原六四郎君も亦數年來研究せられ先頃いと面白きことゞもを發見されました其説を切に懇望せしも君ハ尙一層研究した上他日別に詳しく論しよふと思ふと申されました就いてハ其ことゞもハ諸君他日を御待あされて親しく其説を御覽にあつた方が宜しいと思ひます

第十二節 此二つの音階と琴や三味線等の絃の調子との關係は何れ後篇に至り各國諸樂器と其調子の所に於きまして委曲御話致しませよふ

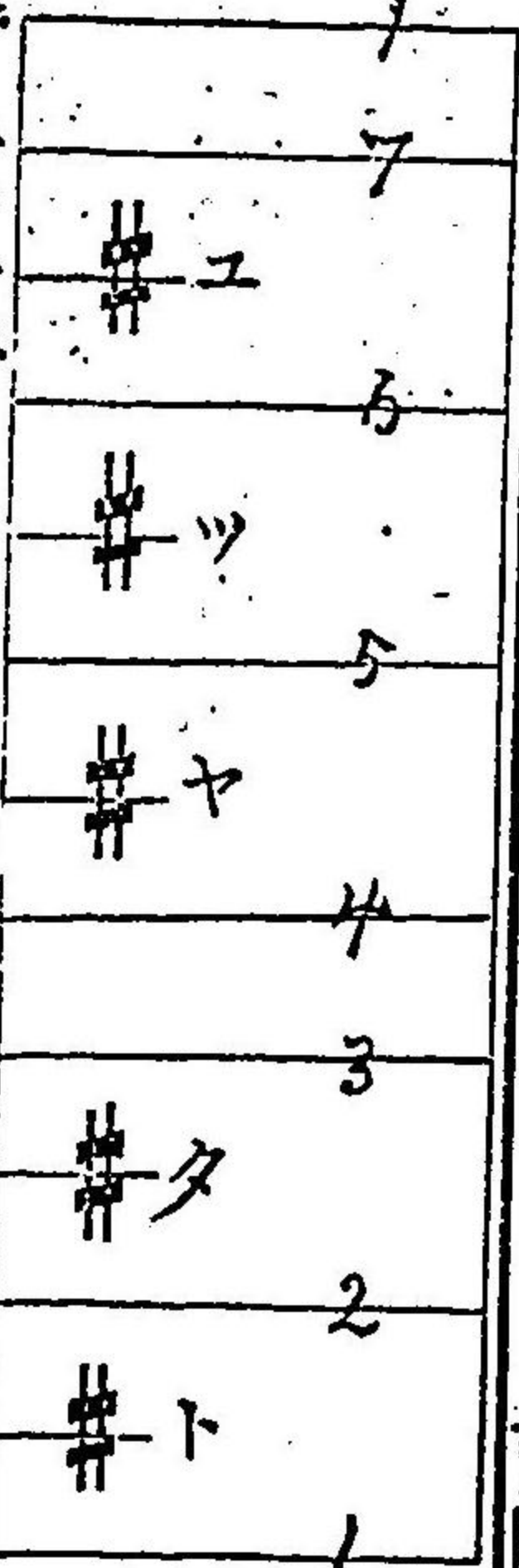
第十章 半音階

第一節 半音階ハ英語にて CHROMATIC SCALE と稱しシテ其の CHROMATIC と申す形容詞ハ原希臘語の (CHROMA より轉訛せし者で其意は彩色 COLOR 也ふ義であります一鉢古人此形容詞を用ゐましたるハ蓋し此半音が全音繼續の間にチヨイチヨイ混りて參るのハ恰も全音に彩色を施せし趣あるからであります又其 SCALE と申すハ矢張梯子の意で半音が順次繼續致して茲に一種の梯子狀即ち音階を構造致しますより申せしものであります

第二節 此音階には二種あります

第一 上行半音階

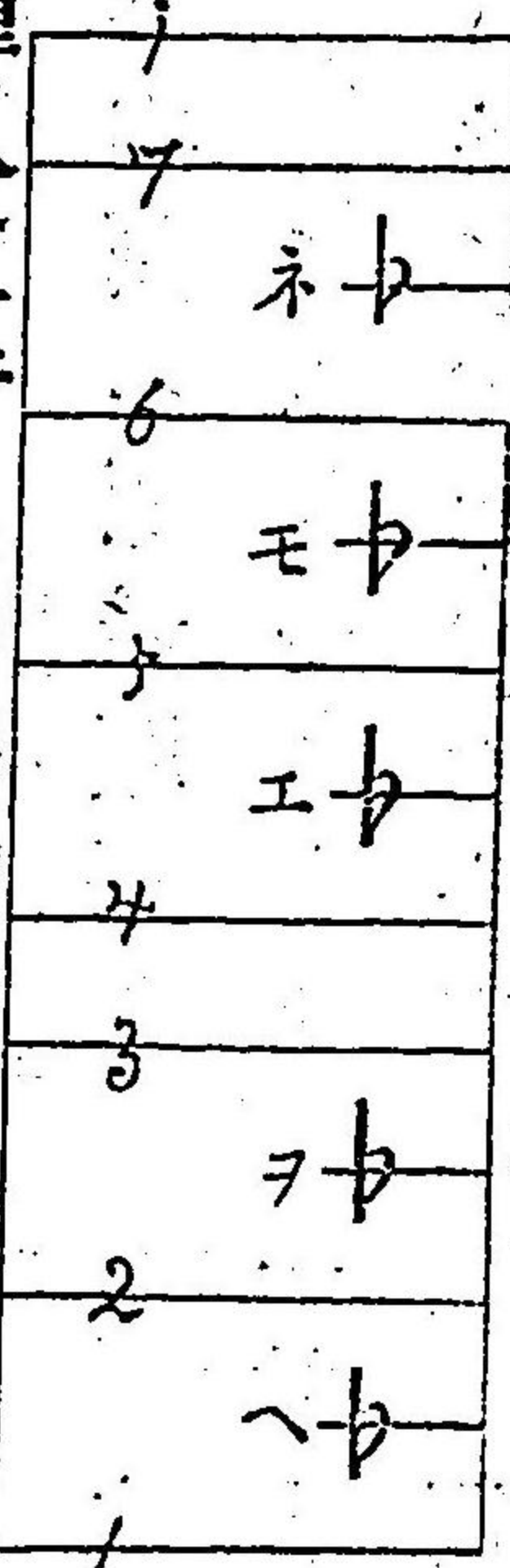
第四十圖



是れハ天然音と嬰種人工音との繼續する者で之をハ上行  
 半音階 ASCENDING CHROMATIC SCALE と申しますシテ此階名ハ  
 下の方よりし(ひ)(ト)(ふ)(タ)云々と稱へます

第二 下行半音階

第四十一圖



是れハ天然音と變種人工音との繼續する者で之をハ下行  
 半音階 DESCENDING CHROMATIC SCALE と申しますシテ此階名ハ

上の方よりし(ひ)(あ)(子)(む)云々と稱へます  
 第三節 此階名ハ第一種のも第二種のも皆唱歌を致す時  
 に何れも唱謠するに用ゐる者であります  
 第四節 獨逸國にてハ(は)調半音階にハ嬰種變種共各一種  
 の名稱を制定しました

第一 嬰種

獨逸名稱	ハ	ウ	HIS	H	AIS	A	GIS	G	FIS	F	EIS	E	DIS	D	CIS	C
普通名稱	は	う	い	え	お	か	こ	さ	し	じ	ち	つ	て	と	な	に

附言 総べてA、B、C、等に(IS)ある語尾を附けて嬰といふ  
 ことを顯すものであります

第二 變種

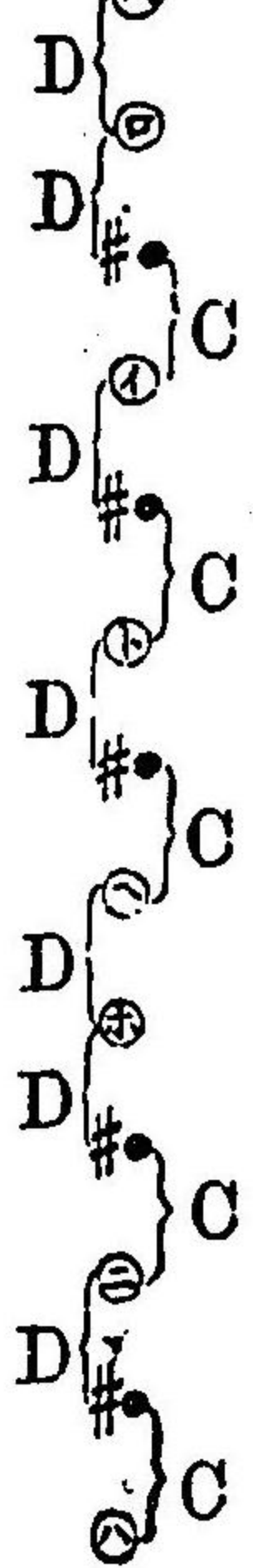
普通名稱	獨逸名稱
は	C
變は	CES
ろ	H
變ろ	HES
い	A
變い	AES
と	G
變と	GES
へ	F
變へ	FES
ほ	E
變ほ	EES
に	D
變に	DES
は	C

附言 総べてA、B、C、等は(ES)ある語尾を附けて變といふことを言ひ顯すものであります

第五節 此二種の半音階に於て其半音ハ全音階的と半音階的と或ハ順次に或ハ交互に繼續致して居ります此二種の半音を識別しますに全音階的DIATONICハDを以て半音階的CHROMATICハCを以て逐一其繼續の有様を御話致しよふ

第一 上行半音階

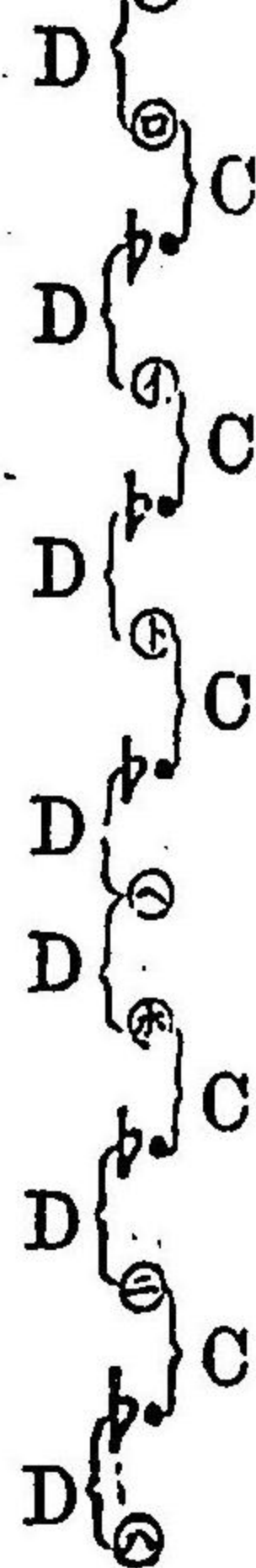
第四十一圖



の如く全音階的七箇半音階的五箇であります唯特別に(タ) (3) (3) (4) (エ) (7) (7) (i)の四箇所のみ全音階的順次に繼續し其他は總て全音階的と半音階的と交互に繼續してをります

第二 下行半音階

第四十二圖



の如く全音階的七箇半音階的五箇あります唯特別に(エ) (4)

并に(4)(3)の二箇所のみ全音階的順次に繼續し其他ハ總て全音階的と半音階的交互に繼續してをります

第六節 此半音階は上行の時と下行の時と其人工音の名稱は相異あります有鍵樂器と申して彼の「ピヤノ」や「オルガン」杯に於きましては皆同一の音律であります果して同一音律でありながら何故其名稱は相異あるやと申しますと此人工音の天然音との關係よりして斯くは其名稱の相異を生ずるのであります例之バ(♭)の如く(♭)ある天然音の中間に一箇の人工音があるとしましよふが此同一ある人工音は先づ(♭)に關係を採りますと(嬰)とあり次に(に)に關係を採りますと(變)とはあります其の他の諸人工音も

皆是れと同様の譯合であります

第七節 然し今一層探索しますと實ハ(嬰)と(變)とハ固より同一音律ではありませんその次章に於て御話を致しましよふ

第十一章 四分音階

第一節 四分音階ハ一口に申すと一音の間を四分致せし者で例之バ(♭)と(に)の間を(嬰)と(變)と申す様に四分致し其四分致せし者を層々相重ねて一種の音階を構造致せし者であります然し其本源より御話致すと随分六ヶ敷くありますゆゑ今回の處ハホンの手短に其事實丈御話致します

第二節 此音階に就きましてハ種々の説があります先  
づ私ハ佛國巴里音樂院教授 AUGUSTIN SAYARD 氏の説に従ひ  
左に其表を掲げます

番 號	律 名	距離之 比
22	嬰 <sup>ロ</sup>	12, 24
21	は	12, 00
20	ろ	11, 10
19	變 <sup>ハ</sup>	10, 86
18	嬰 <sup>イ</sup>	10, 20
17	變 <sup>ロ</sup>	9, 96
16	い	9, 06
15	嬰 <sup>ト</sup>	8, 16
14	變 <sup>イ</sup>	7, 92
13	と	7, 02
12	嬰 <sup>ヘ</sup>	6, 12
11	變 <sup>ト</sup>	5, 88
10	嬰 <sup>ホ</sup>	5, 22
9	へ	4, 98
8	ほ	4, 08
7	變 <sup>ヘ</sup>	3, 84
6	嬰 <sup>ニ</sup>	3, 18
5	變 <sup>ホ</sup>	2, 94
4	に	2, 04
3	嬰 <sup>ハ</sup>	1, 14
2	變 <sup>ニ</sup>	0, 90
1	は	0, 00

附言 此數字ハ顛動數でも其比數でもありませす只音  
階の階段の距離の割合即ち寸法であります  
第三節 今此音階の各音の距離が一目瞭然に見える様に  
しますのには半切でも爪系でも絹系でも其長さ一丈二尺

二寸四分のものを採りて其一端を(は)と定め其他端を(ろ)と  
定めッシテ其(は)より九寸距りたる處を(變<sup>ロ</sup>)と致し一尺一寸  
四分距りたる處を(嬰<sup>ハ</sup>)と致し又二尺零四分の所を(に)とあし  
其他は都て第二節の表に准して何時でも(は)より其距離を  
計り半切からは横線を引き糸からは紙札を附け其距離の  
處に一々律名を記し斯くして漸々上の方へ参りますと遂  
に一種の音階が出来ます其音階が則ち前表の四分音階で  
あります  
第四節 總て絃之樂器に於きましては荀にも名人とか上  
手とか云はるゝ程の人は一曲の音樂を奏します時不知不  
識此音階を用ゐて居ります又唱歌殊に童謡杯に於きまし

ては尋常の人にてても亦不知不識此音階を用ゐて居ります  
現に私が本邦の童謡を取調べて居りますが風琴にて其譜  
をとりて居りますのに例之は(は)より少し低く(ろ)より少し  
高い音が入用と思ふ場合が屢あります斯様は(は)と(も)と  
もつかない其中間の音が入用と申すのは畢竟自然に四分  
音階と申す者のある證據であります

第五節 然し「ビヤノ」や「オルガン」杯の有鍵楽器に斯様に數  
多の鍵盤を備付けますのは甚だ六ヶ敷く假令忍びて之を  
備付けますも斯く繁雜の鍵盤は倒底奏する事は出来ませ  
む故に上の音の嬰と下の音の變とを平均調和致して一箇  
の音と致します其平均致す方法ハ英佛共に「TEMPERAMENT」

申し即ち調和スルユトといふ義で御座います尤も此方法  
ハ隨分面倒なものともみえて既に BOSANQUET 氏ハ其爲め一冊  
の書物を書ひた位で御座います  
第六節 今茲にハ其様か六ヶ敷い事ハ御止めとしまして  
唯 SAVARD 氏の調和表を左に掲げて置きますしよふ此表が則  
ち四分音階を平均致して出来た半音階であります

番 號	律 名	距離之比
22	嬰 <sup>ロ</sup>	12, 00
21	は	
20	ろ	11, 00
19	變 <sup>ハ</sup>	
18	嬰 <sup>イ</sup>	10, 00
17	變 <sup>ロ</sup>	
16	い	9, 00
15	嬰 <sup>ト</sup>	8, 00
14	變 <sup>イ</sup>	
13	と	7, 00
12	嬰 <sup>ヘ</sup>	6, 00
11	變 <sup>ト</sup>	
10	嬰 <sup>ホ</sup>	5, 00
9	へ	
8	ほ	4, 00
7	變 <sup>ヘ</sup>	
6	嬰 <sup>ニ</sup>	3, 00
5	變 <sup>ホ</sup>	
4	に	2, 00
3	嬰 <sup>ハ</sup>	1, 00
2	變 <sup>ニ</sup>	
1	は	0, 00

附言 半音階を構造致すに(は)より(は)及(ろ)までハ一丈



二尺の糸を採り其一端を(は)と致し其他端を(は)及(嬰)と致しッシテ(は)より一尺の距離を(變)嬰(嬰)共有の場所と致し又二尺の距離を(ハ)と致し段々上の方へ斯様に致して參るのであります

第七節 偕此四分音階の事に就きましてハ其外にも

第一 其發生の模様

第二 其調和の方法

等尙御話致したき事ハ山々あります其等は一切後日の事と致しましょふ

### 第四編 移調法

#### 第一章 定義及方法

第一節 如何なる音楽にても総て一ツ調子の音階のみ用ゐて居るものでありますませむ楽曲の性質や樂器の都合により随分調子を變るものであります然し其調子を移すと申しても出鱈目に轉ずる者でハあく又轉ずることハ出來ませむシテ其轉ずるにハ必ず一定の方法があることでありませす是より徐々と其一定の方法の御話を致しましょふ

第二節 偕其調子を轉しませす方法ハ移調法原語ハ英佛共に TRANSPOSITION と申し即ち位置を轉ずる義であります尤此

移調法てふ者の長短二音階中専ら長音階に就いて御話致しましよふシテ又短音階ハ終始長音階に關係致すものすから別段其方法ハ御話致しませむ故に一口に移調法と申せば長音階の調子を轉すること、御承知あされバ宜しいこと、存します

第三節 今長音階を移調致しますにハ二種の方法があります即ち

第一 嬰種移調法

第二 變種移調法

の二種であります

第四節 此嬰變二種の移調法に就きまして通則とも申す

べきものハ

第一 (ハ)調長音階を基礎と致す事

第二 (ハ)調長音階を模範と致す事

の二條であります

第五節 又嬰變二種の移調法に就きまして別則とも申すべきものは

第一 嬰種には

(1) 新調音階の主和絃は必らず基礎音階の下の主和絃より上の方に完全第五度上りて屬和絃に移すべき事

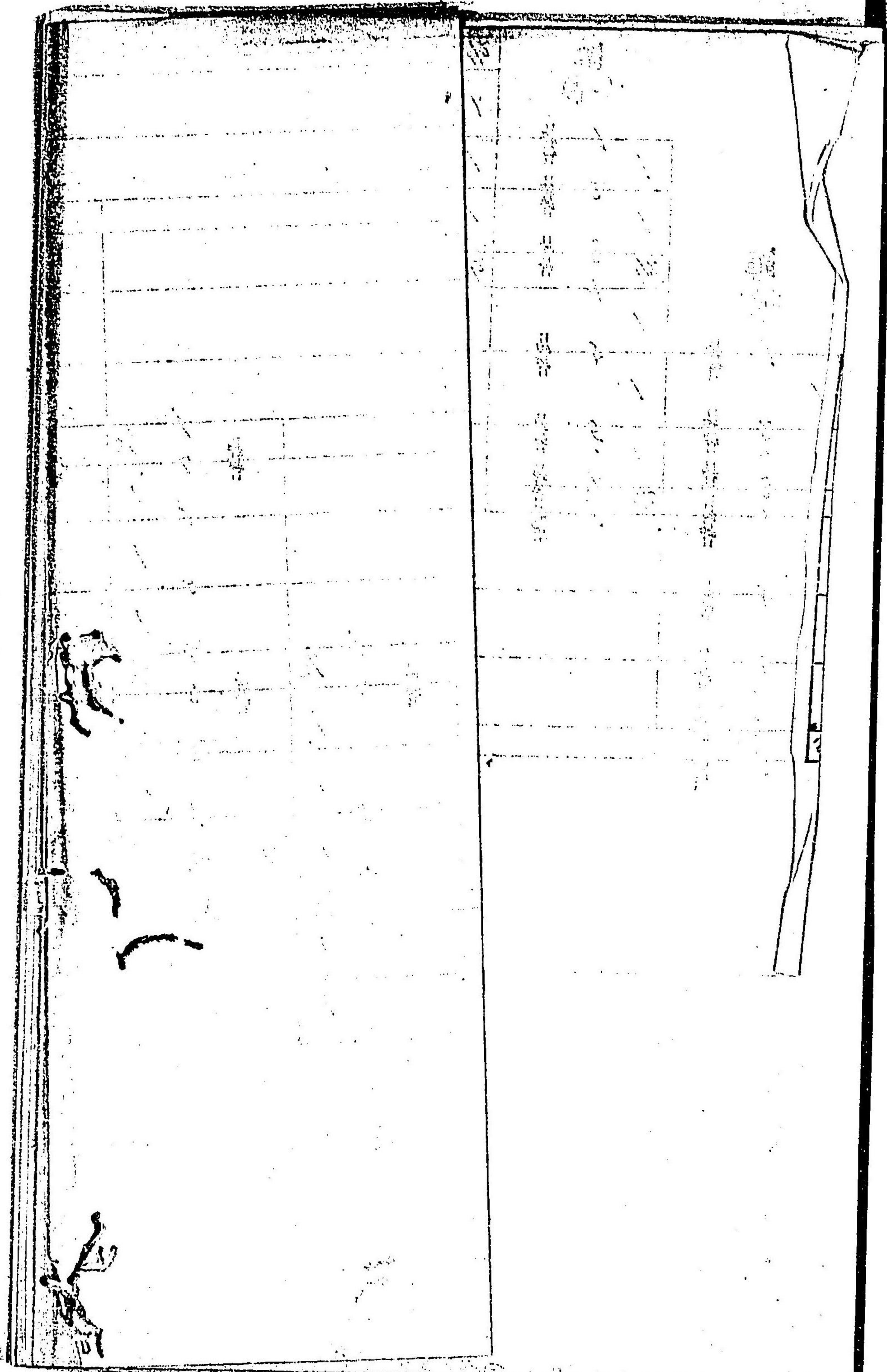
(2) 新調音階の導音は必らぎ半音階的半音上げて之

を構造致し其音には新に一箇の嬰號を附すべき事  
第二 變種には

(1) 新調音階の主和絃は必ず基礎音階の上の主和絃より下の方に完全第五度下りて次屬和絃に移すべき事

(2) 新調音階の次屬和絃は必ず半音階的半音下りて之を構造致し其音には一箇の變號を附すべき事  
であります

第六節 今別紙嬰變二種移調法一覽表に就て諸調音階の各音を對照して觀ましよふシテ其變化の模様は廻らぬ文章にて兎や角と一々御話致しますより寧對照表に就て





Handwritten musical notation on a staff with a key signature of two sharps (F# and C#). The notation includes various symbols such as circles, dots, and lines, possibly representing notes or intervals. The staff is divided into several sections, each labeled with a circled letter and the word "調" (Tune).

Labels and their corresponding data tables:

- (ハ) 調**: Located at the bottom left, with a table of numbers 1 through 7.
- (ト) 調**: Located in the lower middle, with a table of numbers 1 through 7.
- (ニ) 調**: Located in the middle, with a table of numbers 1 through 7.
- (ホ) 調**: Located in the upper middle, with a table of numbers 1 through 7.
- (ロ) 調**: Located in the upper right, with a table of numbers 1 through 7.
- (#ハ) 調**: Located at the top right, with a table of numbers 1 through 7.

The tables are structured as follows:

1	1
2	1
3	1/2
4	1
5	1
6	1
7	1/2

1	1
2	1
3	1
4	1/2
5	1
6	1
7	1/2

1	1
2	1
3	1
4	1/2
5	1
6	1
7	1/2

1	1
2	1
3	1
4	1/2
5	1
6	1
7	1/2

1	1
2	1
3	1
4	1/2
5	1
6	1
7	1/2

表之法種二第

...ハ...ロ...イ...ト...ハ...ホ...ニ...ハ...ロ...イ...ト...ハ...ホ...	(ハ) 調	7	7/2			
		7				
		6	7			
		5	7			
		4	1	(ハ) 調		
		4	1/2	7	7/2	
		3	1	7	1	
		2	1	6	1	
		1	1	5	1	(ホ) 調
				4	1/2	7
			3	1	7	1
			2	1	6	1
			1	1	5	1
					4	1

(ホ) 調

Handwritten musical notation on a grand staff with 12 staves. The notation includes various notes, rests, and accidentals. The piece is divided into sections by key signatures: (b)調 (B-flat major), (b1)調 (B-flat major), (b2)調 (B-flat major), (b3)調 (B-flat major), and (b4)調 (B-flat major).

The notation includes notes with stems and flags, and rests with numerical values. The key signatures are indicated by the number of flat symbols (b) before the key signature label.

Key signature labels: (b)調, (b1)調, (b2)調, (b3)調, (b4)調.

Rest values: 1, 1/2, 2, 3, 4, 5, 6, 7.

Accidentals: b (flat), i (natural), 1/2 (half note), 1 (quarter note), 2 (half note), 3 (quarter note), 4 (quarter note), 5 (quarter note), 6 (quarter note), 7 (quarter note).

御銘々御自分で觀察ふさい其方が善く御理會に成ります  
 第一 第一表の嬰種移調法は

調子の名稱	第八階	第七階	第六階	第五階	第四階	第三階	第二階	第一階
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調
嬰ハ調	嬰ハ調	ろ調	ほ調	い調	に調	と調	は調	は調

第二 第二表の變種移調法は



附言 嬰變兩種共前陳の通り音に各七調子のみではありませむ尙移調することは出来ませが其等を御話致すも殆んど無益であります故是のみで止めて置きます

調子の名稱	第八階	第七階	第六階	第五階	第四階	第三階	第二階	第一階
は調	は	は	は	は	は	は	は	は
ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ
ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ
と	と	と	と	と	と	と	と	と
に	に	に	に	に	に	に	に	に
は	は	は	は	は	は	は	は	は
ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ	ろ
ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ	ゝ
と	と	と	と	と	と	と	と	と
に	に	に	に	に	に	に	に	に
は	は	は	は	は	は	は	は	は

第七節 前陳の此移調法ハ其移調する順序により掲げしものでありまして之を應用しますのハ穴勝此順序によりませむ且つ又(は)より(は)まである二八音内に此諸音階を括約しまして只管有鍵樂器の鍵盤(十二律)の順序により其主調音を配當して参りますと

第一	第二	第三	第四
(1) は	(1) 嬰ハ	(1) 嬰ハ	(1) 嬰ハ
調	調	調	調
(2) 嬰ハ	(2) 嬰ハ	(2) 嬰ハ	(2) 嬰ハ
調	調	調	調

(調)



だと剛(變=)調だと柔く感じます何が何ンと其名義と申すものは妙なるものではありませむか其感しの剛柔は管(嬰ハ)に(變=)の二調のみでハありません総て何調にても嬰種(嬰ハ)のものは剛く變種(變=)のものは柔くあります

第九節 佛國の音樂博士 P. KASTNER 氏は諸調長短音階の性質を一語の形容詞にて最簡易カヌチーに評しました然し其評の當否は如何なるものでしよふか各人の感性によりて相異なるものでありますから全く其通りとは定めかねます角其説によりますと

第一 嬰種

第一 長音階

第二 短音階

(1)	は調	清朗	(1)	い調	悲哀
(2)	と調	野鄙	(2)	に調	優美
(3)	に調	華麗	(3)	ろ調	陰氣
(4)	い調	活潑	(4)	嬰 <small>ハ</small> 調	鬱憂
(5)	は調	粗暴	(5)	嬰 <small>ハ</small> 調	失望

第二 變種

第一 長音階

第二 短音階

(1)	へ調	溫和	(1)	に調	煩悶
(2)	嬰 <small>ハ</small> 調	懇切	(2)	と調	感動
(3)	嬰 <small>ハ</small> 調	莊嚴	(3)	は調	苦心
(4)	嬰 <small>ハ</small> 調	暗黯	(4)	へ調	痛惜

(5) 變調

(闕)

(5) は調

(闕)

たと申すことでありませ

第十節 一躰楽曲にハ其々適當の調子ハ一ツ宛必らずあるものですが然し樂器の音域の都合により或ハ各人音聲の高低により樂師たる者ハ隨分臨機應變に其調子を移す者であります例えバ茲に(ハ)調の曲があるとしましよふ若し兒童に謠せませす時其調子が兒童にハ少し低いわいと思ひますと或ハ一音上げて(ニ)調と致し或は五音上げて(ト)調と致します又茲に(ト)調の曲があります大人の唱ひますのに其調子が餘り高いとおもひますと或は(ヘ)調と致し或は(ハ)調と致すことも出來ませす又樂器の音域に因るとハ例

えは月琴をとを假用して鳥渡唱歌でも致して見やふとおもひ升に御承知の通り彼月琴には柱があります故如何なる調子でも隨意に彈ずる譯には參りませむソコデ斯の如き場合でハ止むことを得ず其曲の調子を移しまして丁度月琴に都合の宜しいやふに致して鳥渡間に合せる事でありませす然し高尚ある楽曲に至りましては斯様に隨意あるとは出來ませむで必らず其曲其曲適當の調子で唱謠するあり演奏するあり致さなければありませむ

第二章 雅俗樂之移調法

第一節 本邦雅樂に於きましては前陳の様に移調法と申す方法は別段ありませむが隨分事宜によりては調子を替

えることがあると申します

附言 西洋では(ハ)調長音階を総ての音階の基礎とも模範とも致し其より嬰種では(ト)調變種では(ヘ)調と移調して参ります其各調に關係短音階がありすが本邦雅樂では別段何調呂旋何調律旋が基礎で且模範であると云事が宜く判りませむから西洋の移調法の様に規則正しくは参りませむ次に調子の荒増を御話致して置ます  
第二節 律呂の二旋法の宮音をバート通り十二律の各音に配當しますと律旋にも呂旋にも各

- (1) 一越調
- (2) 斷金調
- (3) 平調
- (4) 勝絶調
- (5) 下無調
- (6) 雙調
- (7) 鳧鍾調
- (8) 黃鍾調

(9) 鸞鏡調 (10) 盤涉調 (11) 神仙調 (12) 上無調  
の如く十二調子ありて都合二十四調ある筈でありますが本邦雅樂家が現在用ゐて居りますのは大凡

第一 呂旋

- (1) 一越調
- (2) 大食調(平調)
- (3) 雙調
- (4) 黃鍾調

第二 律旋

- (1) 平調
- (2) 盤涉調

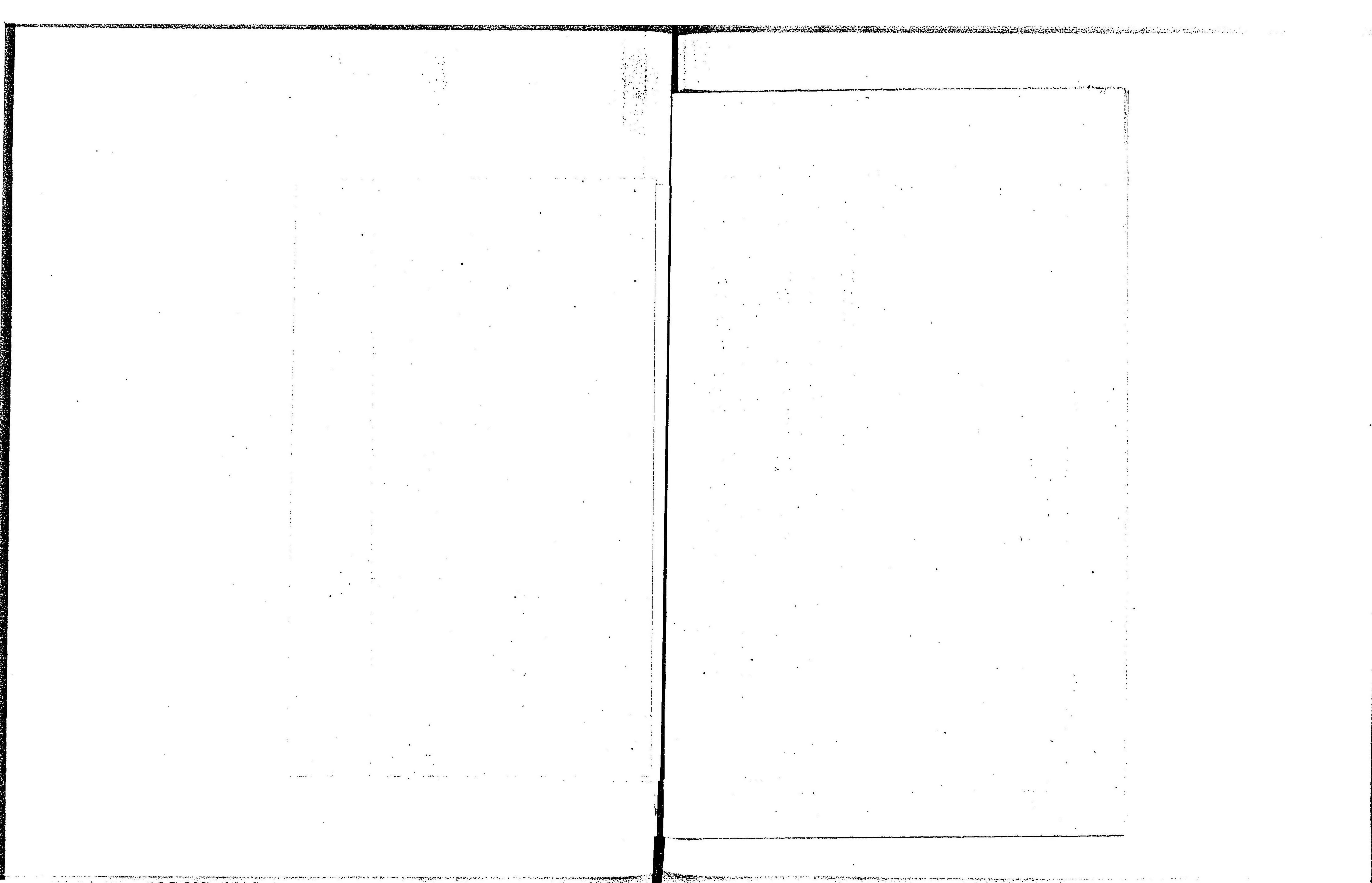
の六箇であります實に此六箇の調子をば六調子と申して  
随分大切な者だとか申します

附言 又此外水調と申す黃鍾調律旋の調子が一つあり  
とか申します

第三節 本邦の雅樂は諸君も既に御承知の通り簫、箏、篳、篥、横  
笛の三管が基で其他の三鼓三絃は皆其に附屬する者であ  
りますソコで此三管と申す者は其音域に頗る制限があり  
ますゆゑ何調にも自由自在に移調し得ると申す譯には參  
りませむ又其附屬の三絃も皆窮屈の樂器で御座います故  
大躰何の曲は何調呂旋とか何の曲は何調律旋とか一定し  
て居ります然し樂曲によりては渡し物とか申して中には

随分移調することが出来る者もあるやに承りました

第四節 然る處は俗樂の方は随分自由に移調する事が出  
來ます是は畢竟樂曲に別段意味の無いのと樂器の都合の  
宜しいのとに重に原因する者でありますよふ委しいこと  
は何れ後日御話致すこと、しましよふ



葉數	行數	誤	正
五	3	どの	どもの
同	8	鎖	瑣
同	10	ぞ	て
九	10	其球を	其球ハ
一五	9	CよりDハ	R'よりRハ
一六	5	CよりCハ	C'よりCハ
同	8	顛動には	顛動ハ
一八	8	彼の音	波の音
一九	10	IMPRESSON	IMPRESSON
二三	6	其上	其故
三二	7	にてハハ	にてハ
三三	1	記憶して云々	御記憶なさる
三四	1	上單音、下單音	上單點音、下點音
同	9	下三點	下三點音
三五	3	一點音、二點音	二點音、三點音
三九	第十一圖	鐘應	應鐘
四六	5	(ハ) (ハ) (ハ) (ハ) (ハ)	(ハ) (ハ) (ハ) (ハ) (ハ)
五三	6	シテ	シテ
同	8	(ハ)より(ハ)	(ハ)より(ハ)
五四	5	(ハ)を	(ハ)を
五六	4	或ハ八音級	或ハ六音級
同	5	(ハ)より(ハ)	(ハ)より(ハ)
同	10	或ハ八音級	或ハ九音級
同	10	或ハ七音級	或ハ八音級
五七	3	(ハ) (ハ)	(ハ) (ハ)
同	3	或ハ十音級	或ハ十一音級
同	3	或ハ九音級	或ハ十音級
五八	10	完全管五度	完全第五度
六〇	11	變とど	とあり
七二	2	旋律でも	旋律的でも
七九	9	本源音程ある	本源音程なる
八二	9	轉回之結	轉回之結論
九五	6	用ゐます	用ゐます尤
一二七	2	完全第度上の上	完全第四度上の方
一三四	9	主調音(ろ)	主調音(ろ)
一六七	2	然る處ハ	然る處

(注意) 諸君御面倒様ながら※點の附きました分は朱墨にて御正誤の上御讀始め下され度存じます



明治二十年三月十四日版權免許  
同年六月出版

定價四拾錢

著者無  
出版人

東京府士族

鳥

居

忱



神田區今川小路  
二丁目十六番地

出版人 須原屋 北島

東京府平民

淺兵衛



日本橋區通一丁目十五番地

印刷所

秀

英

舍

京橋區西紺屋町  
廿六七番地

各府

東京神田區表神保町  
同 日本橋區通三丁目  
同 同 本町三丁目  
同 同 通四丁目  
同 同 同 傳馬町二丁目  
同 同 銀座四丁目  
大阪東區本町四丁目  
同 同 南久寶寺町四丁目  
同 同 北久太郎町四丁目  
同 同 備後町四丁目  
京都 東洞院三條上ル  
同 寫小路三條下ル  
肥前 長崎  
尾張 名古屋  
美濃 岐阜  
中西屋邦太  
丸屋善七  
金港善堂  
牧野善兵衛  
吉川半七  
博間真七社  
岡島真七  
前川善兵衛  
柳原喜兵衛  
梅原龜七  
村上勘兵衛  
須原屋平左衛門  
鎌田勘次郎  
片野東四郎  
三浦源助

賣

捌書林

遠江 濱松 谷島屋源三郎  
同 河 靜岡 三原屋甚藏  
駿河 岡 廣瀨市藏  
同 同 吉見義次  
同 同 吉成壽三郎  
甲斐 沼津 內藤傳右衛門  
信濃 長野 西澤喜太郎  
同 同 高見甚左衛門  
越後 長岡 目黒十郎  
同 同 井筒駒吉  
陸前 仙臺 木村文助  
常陸 水戸 須原屋安次郎  
武藏 川越 岸田屋文吉  
岩代 郡山 富山久之丞

北島千鐘房出版書目

山崎長生

定價二五錢

○唐土名妓傳

定價三十五錢

○良齋文集

定價五十錢

○同續編

定價六十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

○同續編

定價四十五錢

墨林奇標

定價一十七錢

○土佐日記考證

定價四十五錢

○難語考

定價八十錢

○助辭本義一覽

定價四十錢

○自讀歌

定價三十錢

○吾孀筆譜

定價十五錢

○插花衣之香圖式

定價六十錢

○插花百瓶圖式

定價四十錢

各府縣下賣

東京神田區永神保町  
 同 日本橋區通三丁目  
 同 同 本町三丁目  
 同 同 通四丁目  
 同 同 同 傳馬町二丁目  
 同 同 銀座四丁目  
 同 同 大塚區本町四丁目  
 同 同 同 南久寶寺町四丁目  
 同 同 同 北久太郎町四丁目  
 同 同 同 備後町四丁目  
 京都 東洞院三條上ル  
 同 同 宿小路三條下ル  
 肥 前 長 崎  
 尾 張 名 古 屋  
 美 濃 岐 阜

中西屋邦太  
 丸屋善七  
 金港善堂  
 牧野善兵衛  
 吉川半七  
 博 島 真 社  
 岡 島 真 七  
 前川善兵衛  
 柳原喜兵衛  
 梅原龜七  
 村上勘兵衛  
 須原屋平左衛門  
 鎌田勘次郎  
 片野東四郎  
 三浦源助

捌書林

遠江濱松  
 同 同 同  
 駿河 靜岡  
 同 同 同  
 同 同 同  
 甲斐 山梨  
 信濃 長野  
 同 同 同  
 越後 長岡  
 同 同 同  
 陸前 仙臺  
 常陸 水戸  
 武藏 川越  
 岩代 郡山

谷島屋源三郎  
 三原屋甚藏  
 廣瀨市藏  
 吉見義次  
 吉成壽三郎  
 内藤傳右衛門  
 西澤喜太郎  
 高見甚左衛門  
 目黒十郎  
 井筒駒吉  
 木村文助  
 須原屋安次郎  
 岸田屋文吉  
 富山久之亟

北畠千鐘房出版書目

山崎長卿著  
 ○唐土名妓傳 定價二十五錢  
 安積良齋先生著  
 ○良齋文集 正編 三冊 定價五十錢  
 同  
 ○同 續編 四冊 定價六十五錢  
 此書ハ良齋先生ノ名文名詩ヲ擇萃シ且先生東省南遊ノ雜記日録ヲ附録シタル書ナリ學者一讀スレハ詩文章ノ氣焰ヲ長生シ大ニ其才思ヲ増益スルトコロ有リ  
 同  
 ○良齋閑話 正編 二冊 定價四十五錢  
 同  
 ○同 續編 二冊 定價四十五錢  
 此書ハ良齋先生平生ノ論議談話ヲ記載ス語言一時ノ涉筆ニ係ルト雖聖賢ノ旨治亂ノ迹議論正實一モ辭サハル所ナシ王侯士庶之ヲ開闢セハ齊家治國守身勸職ノ道方ニ自ラ得テ知ルヘシ岡村實石先生著  
 ○黃石齋詩集 初二集 四冊 定價一圓  
 同  
 ○同 三四集 附 浪迹小稿 五冊 定價一圓

雲山先生著

○墨林奇標 定價十七錢  
 此書ハ四時草木花實禽蟲介昆走獸ヲ部分ニシテ一々唐宋金元明清ノ諸名家ノ詩句ヲ果メ席上揮毫題詞等ノ費用ニ備フ故ニ野遊舟行書畫會諸雅集等ニ懷中ニシテ其便利殊ニ多シ實ニ翰墨場中ノ和珠ト稱ス風流才子坐右ニ欠ヘカラサル書ナリ岸本由都流考證  
 ○土佐日記考證 二冊 定價四十五錢  
 池藤守部大人著  
 ○難語考 一名山彦 三冊 定價八十錢  
 橋守部大人著  
 ○助辭本義一覽 二冊 定價四十錢  
 海野遊翁著  
 ○自讚歌 二冊 定價三十錢  
 山田檢校作  
 ○吾孀箏譜 一冊 定價十五錢  
 遠州流貞松齋著  
 ○插花衣之香圖式 十六冊 定價一圓六十錢  
 馬丈著  
 ○插花百瓶圖式 二冊 定價四十錢

練雲齋著

○瓶史國字解

十一册 價金二圓六十錢

一松齋撰

○插花千代之松

三册 價金三十五錢

庭松齋撰

○同庭之松

四册 價金四十錢

松柏齋一瓢撰

○插花四季園

四册 價金四十錢

本因坊村瀨秀甫先生著

○打碁方圓新法

全二册 正價金六拾錢

故秀甫先生ハ本邦ノ奕秋タル人ノ知ル所ナリ該書ハ先生自ラ  
國考ノ石立互先ヨリ四子マテ八十番並ニ打碁先師本因坊秀和  
ト十番秀銀ト十番ヲ撰定シ加ルニ共ニ詳論スル所ヲ撰述シタ  
ルモノニア先編後編起虎什ノ勢力ヲ燈上ニ見ルカ如シ世ノ  
仙客ヲシテ一目前ニ對局ノ謀略ヲ知ラシムル真ニ茶壇ノ真兵書  
トモ云フヘキナリ

本因坊村瀨秀甫先生編輯

○圍棋新報

自第壹集 五册合本一册 正價金貳拾五錢

凡ソ棋ハ著手ニ就テ評スヘキ者アリ形勢ニ因テ論ズヘキ者アリ  
リ著手ノ一斑ヲ評シテ形勢ノ如何ヲ論セサルハ其固奥ヲ盡  
ス能ハス此書著手ト形勢トヲ併論シ其全豹ヲ示シ讀者ノ一助  
ニ供ス

秋山村著

○新撰碁經大全

全一册 正價金拾五錢

右ハ名人ノ圍碁を載セ始め大目小角四ツ手石立の善惡より圍  
碁心得の方法に至る迄の大略を掲げ後ハ名棋の圍碁を載テ實  
に稽古者の鑑鏡ナリ

川村知足編

○圍碁見聞誌

全一册 定價金三拾錢

右ハ凡ソ圍碁に係る事ハ碁の見聞の儘を筆述テ殊に古人の名  
碁を加へたれハ同好諸君必備の書ナリ

白雲堂月琴子編 松高堂堤先生監

○三聲曲類纂

六册 價金八十錢

目錄の榊樂○京師浪花○諸流淨瑠璃○始原○小野通女○事○三  
竹略傳○座○作者名○諸流淨瑠璃○同○淨瑠璃○外題○三○部○浪  
題○記○江○戸○諸○流○淨○瑠○璃○諸○流○淨○瑠○璃○諸○流○淨○瑠○璃  
小○明○部○類○年○代○の○考○江○戸○長○明○部○記○追○考○此○部○諸○流○淨○瑠○璃  
罪○多○シ○ト○イ○エ○ト○モ○淨○瑠○璃○三○條○十○八○ト○俗○曲○ヲ○以○テ○人○ヲ○勞○ス  
テ○其○名○ヲ○採○取○セ○ン○今○將○二○相○續○セ○ル○ハ○其○家○ニ○野○乘○ニ○索○テ○ナ  
レ○タ○ル○ヲ○採○取○セ○ン○今○將○二○相○續○セ○ル○ハ○其○家○ニ○野○乘○ニ○索○テ○ナ  
シ○終○レ○ル○ト○漏○タ○レ○ト○モ○節○ム○ア○ラ○バ○書○房○ニ○示○シ○玉○ハ○ン○ト○フ

其他出版發兌書籍數百種

東京日本橋通登丁目 須原屋 北畠茂兵衛